

法留乘運編集

明治二十年五月十六日內務省交付
0960

南無天
地
平
圓
解
全

五月出版
明治
松琴堂藏

行指



業

不

可

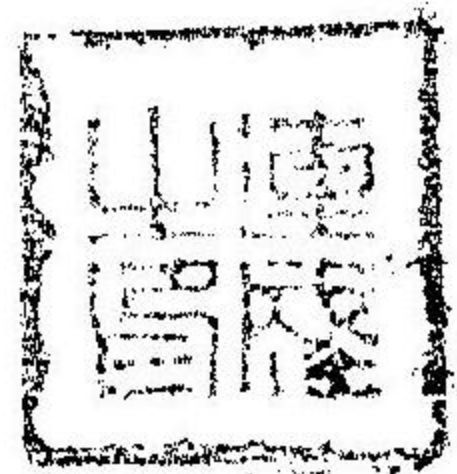
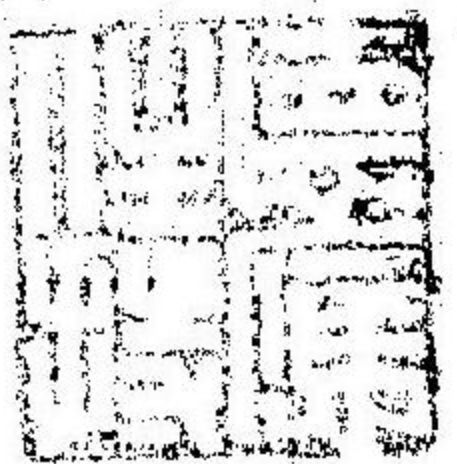
果

思 議

明 治 廿 年 二 月

生 示 佳 留 君

接 任 連 城



序

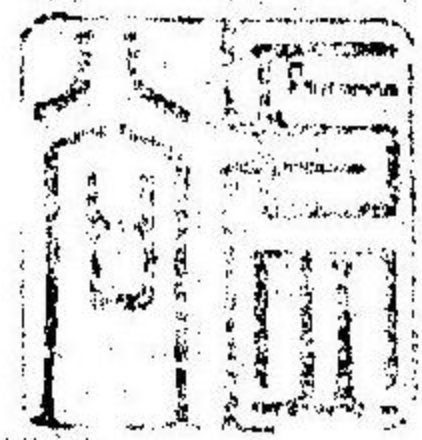


輓近滿內學事手勢與言
地球說益感之矣乘運老人
夏須彌界說之湮滅卧
病中為此著此將自剖
刷氏語余題一之矣不
詳曆理以故不強細論
當否雖然深嘉其志

聊畫之小序端云

明治丁亥三月

愛宕道人看



自序

夫天ハ渺漠タリ、地ハ廣遠ナリ、豈凡慮ノ能ク及フ所ナラン
ヤ、然ルニ西人妄推臆度ヲ以テ、漫ニ地球動轉ノ說ヲ立テ、万
物悉ク彼ノ天帝ノ造化セシモノトナシ、其日月星辰ノ如キ
モ唯コレ世界組織ノ爲ニ製造セシモノニシテ、尊崇スヘキ
モノニアラストナス、嗚呼何ソソレ亡狀ノ甚シキヤ、若ソレ
斯ノ如キノ說ヲ用ユルハ、第一ニハ吾皇國ノ國体ヲ妨害
シ、第二ニハ印度支那古聖賢ノ遺教ヲ廢棄スルニ至ル、苟モ
國恩ヲ荷ヒ聖教ヲ奉スルモノ、豈此說ヲ默聽坐視スヘケン
ヤ、心地說至ニハ世間凡夫無慧眼迷恩所是正ク今ノ如キ邪
說ヲナスモノヲ指ス、今之ヲ人民生活ノ上ニ取テ云フトキ
ハ、日月照護ノ恩分ヨリ大ナルハナシ、立世論等ヨリ天子月

天子恒護持邦育國土人民ト云フモノ是ナリ、之ヲ吾國史ニ
 參照スルニ、其日天子ト即チ吾皇統ノ祖先タル天照太神
 ニシテ、其月天子トハ即チ月讀尊是ナリ、此故ニ累代ノ皇帝、
 躬自ヲ敬神ノ誠衰ヲ尽シ、万民ニモ篤ク此旨ヲ諭示シ玉フ、
 然レハ則チ苟モ我邦ノ人民タルモノ、深ク其聖旨ヲ感戴シ
 尤モ之ヲ崇敬スヘキハ聖ヲ待タサルナリ、若ソレ之ニ反シ
 テ、彼ノ恩所ニ迷失セル邪說ヲ妄信シ、禍恩アル兩曜ヲ蔑視
 スルカ如キアラハ、豈之ヲ類畜ノ賊民ト稱セスシテ可ナラ
 ンヤ、殊ニ佛教徒タルモノ皇恩尤モ感謝セサルヘカラス、往
 昔釋尊吾佛教ヲ以テ、國王大臣ニ付屬シ玉フ、仁王經說其東漸シ
 タ吾邦ニ齋來スルコ及ンテ、皇家首トシテ之ヲ尊崇シ玉ヒ、
 諸臣之ヲ崇敬セラレシニ因リ、全國皈依スル宛モ艸ノ風ニ

靡クカ如ク、今ニ至リテ千三百有餘年ノ久シキ、國威ノ隆盛
 ニ沿フテ、此法流ノ繁布ヲ致スモノ、豈皇威護持ノ與力ニ非
 ルナキチエシヤ、若ソレ皇威薄弱ニシテ外護ナキハ、他邦
 ノ侮辱ヲ蒙リ、法光モ國威ト共ニ衰弱ニ皈スルモ計リ難カ
 ラン、吾邦ハ祖先太神ヨリ以テ今上帝ニ至ルマテ、一系聯
 綿トシテ曾テ外國ノ凌侮ヲ受ケス、國威益張り、外護亦厚フ
 シテ、法光愈輝ケリ、神德皇恩豈感謝セサルヘケンヤ、回視ス
 ルニ今ヤ世上洋學盛ニ行ハレ、法律、經濟、窮理、化學等ノ諸科、
 一トシテ範チ西洋ニ採ラサルハナシ、就中理學ノ最一タル
 天文學ノ如キハ、專ラ地動說ノミニシテ其意旨ノ皈スル所、
 所謂日月星辰ハ尊重スヘキモノニアラスシテ、唯天帝造化
 ノ巧妙ノミ崇敬スヘキト云ニアリ、此故ニ之ヲ學フモノ中

心之ヲ信シ識ラズ知ラス彼ノ造化教ニ沈溺シテ、其敬神ノ誠意ヲ尽サズ遂ニ國体ヲ毀害シ、君上ニ蔑如シ、上下不和ヲ生スルニ至ラン、輿地誌略ニ云西洋ノ文明ハ日ニ月ニ進歩スト雖モ方今猶子戈ヲ用ユルヲ止マス人民ヲ殺害スコレヒ下不和ヨリ起ルナリト其上下不和ヲ生スル所以ハ、蓋シ日月及ヒ皇帝ヲ尊崇スルノ意ナキニ因スルヤ明カナリ、我邦ノ人民ハ、云フ日月ハコレ吾皇祖先ニシテ、今上帝ハ其系統ナリ、故ニ深ク之ヲ尊敬奉戴セスンハアルヘカラスト、夫然リ而シテ其日月ノ尊崇スヘキ實理ヲ識知セント欲セハ、彼ノ地動說ニ反照シテ、古聖徹鑒ノ真說タル平天平地ノ實義ヲ深ク研尋セサル可ラサルナリ、然ルコト今ヤ吾繼徒中ニ於テモ聊カ洋曆ヲ學習スト雖モ、其梵曆ノ平天平地ノ實理

ニ至リテハ、之ヲ領解スルモノ稀ナリ、况ヤ一般學生ニ於テチヤ、偶志アル者モ專ラ洋說ヲ信シ梵曆ハ其所說甚タ粗漫ニシテ彼ノ洋說ノ精緻ナルニ及ハスト自認シ、深ク其兩說ノ是非ヲ研尋スルニ意ナク、之ヲ教門外ニ放置スルノ輩少カラズ、嗚呼コレ何事ソヤ、幽冥共ニ一佛ノ所說、而シテ明界現量ノ事スラ猶其説明ニ梗塞フル所アリテ、他チシテ信セシムル能ハズ、况ヤ幽界ノ事チヤ、豈之ヲ學ハズシテ可ナランヤ、若ソレ之ヲ學ハズシテ現量ノ所說スラ之ヲ知ラスンハ後ニ不測ノ大害ヲ醸出スルモ蓋シ知ルヘカラサルナリ、若之ヲ研尋セハ、則チ深義自ラ聞見シテ何ノ足ラサル所カコレヲラシヤ、顯界ノ理既ニ明哲ナレハ六道ノ所在亦自ラ判然シテ幽界ノ說誰レカ之ヲ信セサルモノアラシヤ、破邪顯

正之ヲ掌ニ指スカ如キ歟。余此ニ憂ヲ懷ク久矣、今ヤ老ヒ且
 ツ病葺ニ臥スト雖モ、此志愈深ク、頃日聊カ思フ所アリテ此
 小冊子ヲ稿ス、其意趣ニアリ、一ニハ釋尊遙カニ末代ヲ徹鑿
 シテ地動說ノ起ルヲ知リ之カ破釋ノ懸記アリ、故ニ此懸記
 ノ文ニ就テ佛教ノ眞義ヲ開見シ、以テ聊カ佛恩ノ深厚ヲ感
 謝ヒント欲ス、二ニハ天平地ノ說ヲ成立シテ、日月ノ尊崇
 セサルヘカヲサル理由ヲ示シ、以テ聊カ報國ノ微衷ヲ致サ
 ント欲ス、庶幾クハ同感ノ士、此小冊子ヲ端緒トシ、廣ク内外
 ノ曆書ヲ看破シテ、此眞說ヲ擴張シ、以テ國恩佛惠ヲ併セ報
 セラレントナシ、今回同志某等ノ勸奨ニ因リ、之ヲ活刷ニ付シ
 以テ有志者ニ頒ツ、于時明治第二十星次丁亥春三月梅花爛
 熳黃鳥嚶々痾痾稍々快ヲ覺フ乃チ之ヲ録ス、

凡例

- 一 今書ハ破邪顯正ノ二篇ニ分チ其第一篇ニハ專ラ彼ノ地
 動說ヲ駁シ其第二篇ニハ畧シテ天平地ノ實理ヲ辯ス
 ルモノナリ
- 一 西洋曆書古今其數アリ今ハ唯其世人ノ能ク知ル所ノモ
 ノ兩三部ニ就テ之ヲ論ス而シテ彼レ地圓ノ證據ヲ示スニ
 數例ヲ出スト雖モ之ヲ要スルニ本篇ニ掲ケル所ノ三證
 ノ範圍ヲ出テズ又其難問ノ如キモ數多コレアリト雖モ
 今ハ彼ノ三證ニ對シテ三駁ヲ設クル耳
- 一 釋教大藏中其說曆理ニ及ブモノ百餘部アリト雖今ハ唯
 其切要ノ文數個所ヲ摘載スル耳
- 一 梵曆中ニ於テ陰陽曆、推步曆及ヒ天地曆等アリ其中天地

曆ハ尤モ今日ノ急須トス何トナレハ洋曆ノ所立ト大ニ
 反對スルモノハ此天象地理ノ説ナリ故ニ之ヲ講明スル
 ナ今書ノ至要トス

一釋教ノ天文地理ハ甚タ廣説ナリト雖今ハ彼ノ地球圖ニ
 比對シテ唯南閩浮提洲人居ノ地ノミニ約シテ平面圖ヲ
 示シ以テ天度縮象ノ理ヲ畧述ス

一近時佐田介石氏視實等象儀詳説等ノ曆書ヲ撰シ視實兩
 象ノ理ヲ説テ世人ノ迷ヒヲ晴シ又勝國安慧氏護法新論
 等ヲ著シ総別二輪ヲ以テ翳者ノ惑ヒヲ解ク二氏ノ梵曆
 ニ於ケル其績偉ト謂フヘシ唯惜クハ曆理ノ參差シテ領
 解シ易カラサル所アリテ之ヲ講究スルモノ甚タ少ナシ
 予之ヲ憂フル深カシ故ニ今其簡易ナルモノヲ摘取シ以

テ初學ノ士ノ楷梯ノ爲メニ自ノ所得ノ大要ヲ述ス其精
 細ノ深義ニ至リテハ漸ヲ追フテ將サニ起草セントス看
 官之ヲ諒セヨ

梵洋對說 天地平圓解標目圖次

第一 破邪篇

第一章 海面弧背ノ證ヲ破ス

第一圖 コロンベユス 閩龍氏亞米利加發見航海ノ圖

第二章 地球一週ノ證ヲ駁ス

第二圖 地球方位磁石方位ノ二種比驗ノ圖

第三圖 橫濱ヨリ米國桑港マテ平面上北洋ヲ航通ス

サンフランシスコ
ルノ圖

第三章 月蝕地影ノ證ヲ摧ク

第四圖 地動說ノ月蝕地影ノ圖

第五圖 北極星出地度數ノ四時一定ナル實驗ヲ以

テ平地說ノ現量相應ヲ示スノ圖

第六圖 地動說ノ現量ニ相違スルノ圖二種

第二 顯正篇

第一章 平面與地及ヒ天度縮象ノ理ヲ解ス

第七圖 平面與地春分ノ圖

第二章 日月交蝕現量實驗ノ圖ヲ解ス

第八圖 日蝕ハ居處ニ隨フテ見ト不見アルノ圖

第九圖 月蝕皆既ノ節ハ万国同時同見スルノ圖

以上

甲 彼ノ圖ノ如クナラハ冬夏ノ寒暑マサニ相

ヒ交換スヘキヲ難スル圖

乙 太陽若シ不動ナラハ其北極星トノ距離四

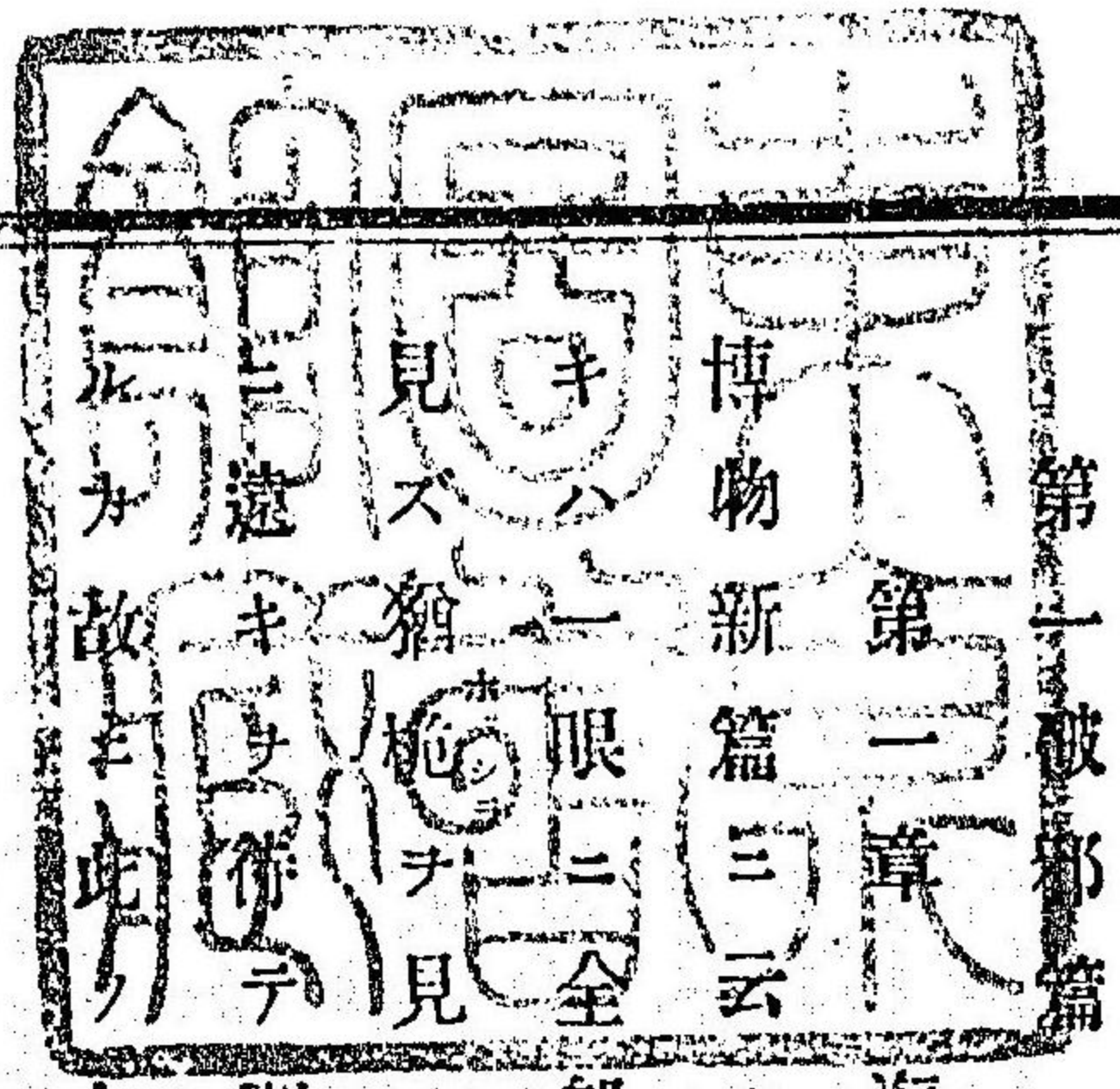
時常ニ同度ナルヘキヲ難ス

又地球若シ動轉スルナラハ其北極星出地

ノ度四時必ス變更スヘキヲ難スル圖

梵洋對說 天地平圓解

湖東 法留乘運著



第一破都篇

第一章

博物新篇三云ク人海岸ニ立テ船ノ開行ヲ見ルニ船近キト

見キハ一眼前ニ全船ノ物ヲ見ル船去ルト稍遠キトキハ船身ヲ

見ズ猶桅ヲ見ル再ヒ遠キハ只桅旗ノミヲ見ル又去ル更

ニ遠キヲ辨テ則チ船旗モ亦見ヘズコレ正ク海面ニ弧背ア

ルカ故ニ此ク如ク次第々々ニ見ヘサルヲウルト地球說

略ニモ亦之ヲ舉テ以テ地圓ノ一證トセリ○今破メ云船遠

サカルニ從テ物ヲ見サルモノハ決シ海面ニ弧背アルカ故

ニアラス物皆漸ク遠サカレハ漸ク少微トナリ愈遠サカレ
ハ遂ニ見ヘサルニ至ル、唯コレ見ヘサル^目見ル能ハサルニ
アラス、其證ハ先ツ海岸ニアリテ旗ヲモ見ズト云ハタ、素
眼ノ彼ニ届カサルノミ、コレ素眼ハ卅里外ヲ微見スル能ハ
サルカ故ニ、若シ此時望遠鏡ヲ用ルルハ全船ヲ見ル^目ヤ明
カナリ、又其船百里以上ヲ遠カルルハ復見ヘス、此時又至精
ノ望遠鏡ヲ用ルルハ見ユル^目復初ノ如シ、夫如此漸ク追テ
大遠鏡ヲ用ルルハ千萬里程ヲ距ツト雖必ス歴々見ツヘキ
ナリ、然レハ則チ見ト不見トハ唯コレ距離ノ遠近ニ關スル
ノミニメ決ノ海面ニ弧背ナルモノアリテ之カ障碍ヲナス
ニアラサルヤ明カナリ、○問博物新篇ニ云千里鏡ヲ以テ山
ノ頂ニ在テ海ヲ望ムニ船ノ到ル必ス先ツ旗ヲ見、漸ク近ツ

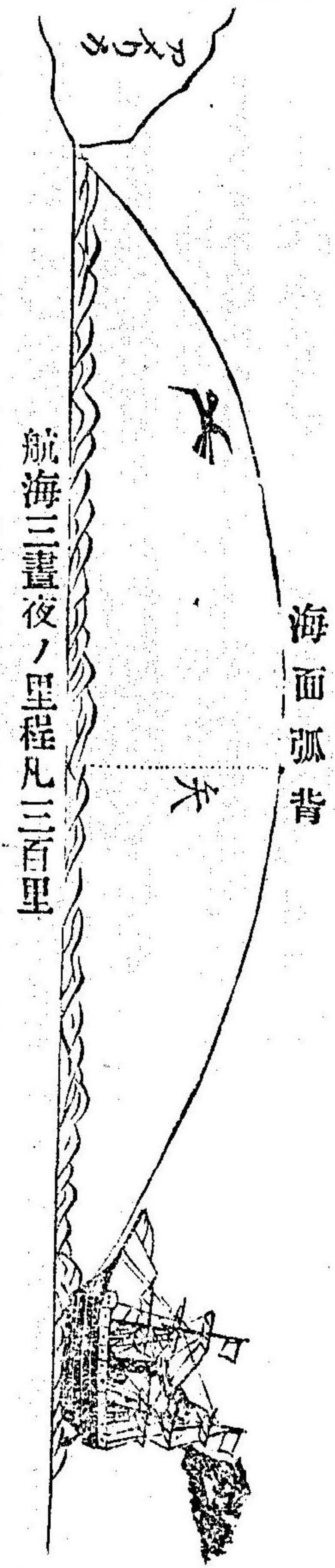
キテ桅ヲ見、更ニ近ツクハ船身ヲ見ル、若シ水面平坦ナレ
ハ遠ク望ムルハ先ツ粗大ノ物ヲ見ルヘシ故ニ先ツ船身ヲ
見、次ニ桅ヲ見後ニ旗ヲ見ルヘシ、今之ニ反スルモノハコレ
海面圓凸ノ證ニアラス、何ソヤト、答コノ問理ニ應セス
何トナレハ船身ハ粗大ナレ^目卑キニアリテ水ト聯接スル
カ故ニ先ニ見ル^目能ハス、又旗ハ小ナリト雖高キニアル故
先ニ見ル^目理ノ當ナリ、何ソ此ヲ以テ地圓ノ證トスヘケン
ヤ、平面說ト雖モ高キモノヲ先ニ見^目卑キモノヲ後ニ見ル^目
云如キハ汝カ說ト全ク同シ、子能ク聽ケ初メ旗ヲ見シ^目其
千里鏡ニ代ルニ更ニ精巧ナルニ千里鏡ヲ用キテ之ヲ望ム
ルハ桅モ船身モ一時ニ共ニ望見スル^目ヲ得ル、故ニ世界最
一ノ高山ニ登リ一萬里以上ヲ望ムヘキ至大望遠鏡ヲ用ヒ

テ望ムキハ雲霧ノ障礙ナキ以上ハ全世界平坦ノ海陸ナ一
時ニ透見スルヲ得ヘシ、何レノ海面ニカ弧背ノ相アラン
ヤ、況ヤ水性ハ固ヨリ正直ニ平流スルモノナレハ決ソ弧
背上ニアルヘキ理ナシ、已ニ物理書ニモ水性ハ平ニ流ル、
遠近ヲ以テ其性ヲ變セス水面ヲ見ルニ亦必ス一線ニ平流
スト云ヘリ、彼レ既ニ水性ノ平流スルヲ知リ乍ラ面カモ海
面弧背ノ説ヲ立テ地心ノ吸引力ヲ以テ之カ迸散ヲ防クト
云何ソ誣フルノ甚キヤ、彼レ廣ク引力ノ理ヲ談スレモ之ハ
海面既ニ弧背アルモノト定メシ上ニテ其水散ノ難ヲ防カ
ン爲ニ此遁辭ヲ設クル耳、其基本タル海面弧背ノ説既ニ現
量ニ背クカ故ニ其遁辭タル引力論今何ソ深ク之ヲ尤ムル
ヲ須ン、今其海面弧背ナキ一證ヲ舉クレハ則チ第一圖ノ如

ク彼ノ閣龍カ數百里ノ遠洋ニ翔翺スル小鳥ヲ見付テ其必
ス鳥嶼アルヲ豫知セシカ如キハ、コレ現量ニ世人ノ熟知
セシ明證ナリ、聯邦誌略北米合衆ノ説ニ據ルニ、西曆一千四
百九十二年吾明應伊太里國ノ閣龍、西班牙國王后ノ命ヲ奉
シ舟子百二十人ト共ニ大船一般小船二般ニ乘シ大西洋ニ
航ス、而シテ西ヘ西ヘト進行シ既ニ廿餘日ヲ經ルト雖モ更ニ
眼睛ニ遮ルモノナシ、舟子等云ク食糧將ニ乏シカラントス
今ヨリ船首ヲ回シ本國ニ歸ラント、閣龍自ラ謂ラク命ヲ奉
メ此ニ來ル功ナク空ク飯ル何ノ面皮カアラント、是ニ於
テ大誓ヲ發シ衆ニ告テ云、勞ヲ積テ已ニ此ニ至ル空ク飯ル
詮ナシ、今更ニ五日ヲ期メ進行セン尙見ル所ナクハ斷ソ
命ヲ撤セント、大ニ衆ヲ勵メ進ム、而シテ其時橋上ニ一床ヲ設

ケテ遠鏡ヲ懸ケ專ラ西ヲ望ミシニ、遙空始テ一ノ小飛鳥ヲ
 認メ、コシ必ス島嶼アルノ前兆ナリト大ニ喜ヒ、其ヨリ兩三
 日ヲ經テ又炊烟ヲ見付ケ、遂ニ儀ニ着スルヲ得ル、今ノ亞米
 利加洲即チ是ナリト、此海里ヲ算スルニ漁船一晝夜ノ速力
 ハ通例二百廿里海里ハ十七丁弱トス、故ニ之ヲ陸里數丁六
 以トスニ化スレハ一百餘里ナリ、而シテ今之ヲ以テ算スルニ

第一圖



彼レカ飛鳥ヲ認メシヨリ着儀マテ先ツ三晝夜トスレハ
 其距離凡ソ三百餘里陸ナリ、而シテ此間ニ立ツ所ノ矢ヲ求ム
 ルニ弧矢弦ノ術地球圓徑三千二百四十七里ヲ自乗シ内三
 百里ノ自乗暴ヲ減シ餘ヲ開平シ而シテ其商ヲ圓徑ノ内ヨリ
 減シ餘ヲ折半スレハ矢ヲ得ルニ據ルルハ凡ソ六里卅四丁
 一間一尺二寸ノ矢ヲ立ツ、而シテ飛鳥如何ニ高ク翔ケルモ一
 里餘ヲ出テサルヘシ況ヤ六里餘ヲヤ、海面若シ圓形ナレバ
 ハ必ス上ノ如キノ矢ヲ立ツカ故ニ其背頂ニ遮蔽セラレ決
 シテ彼ノ飛鳥ヲ見ル能ハサルナリ、又炊烟ヲ見付シヨリ着
 儀マテ近ク一百里トスレハ其間ノ弧背ニ廿七丁五十一
 間一尺七寸ノ矢ヲ立ツ、又漸ク近ツキ僅ニ三里ノ距離ニ於
 テモ十五丁四尺ノ矢ヲ立ツヘキハ算理ニ於テ誣フヘカラ

ス、炊烟如何ニ高ク騰ルト雖モ二三丁ヲ過キス、然レハ三里ノ洋中ヨリ之ヲ望ムモ十五丁餘ノ弧背頂ニ阻テラレ決メ之ヲ見ルヘカラス、何ニ况ヤ一百里ヲ距ルニ於テチヤ、然リ而シテ今閩龍現ニ三百里ヲ距テ、飛鳥ヲ見、漸ク近ツキ一百里ヲ去ルニ及テ炊烟ヲ認メタリ、而シテ其間一物ノ之ヲ阻隔スルナシ、此ニ由テ之ヲ觀レハ、地狀果ソ球圓ナルカ海面果シテ弧背アルカ知者ヲ待タズニ知ルヘキナリ、然レハ則チ此實地經驗ノ一説ヲ以テモ地狀ハ球圓ニアラスノ海面平坦所謂弧背ナルモノ決メテ之ヲキテ確證スルニ足レリ、又我嘉永六年ニ米艦四艘始メテ浦賀ニ來ルル、遠鏡ヲ以テ之ヲ望ムニ離程三百餘里海里ヲ距テ能ク具ニ其艦數ヲ數フルヲ得タリ、又彼ノ艦隊ハ同ク遠鏡ヲ以テ吾高山及ヒ海岸ノ景

況ヲ詳見セリト、此説ニ據テモ海面若弧背(此弧背ノ矢ヲ求レハ壹里廿一丁卅六間ヲ得ル)アリトセハ、仮令密獄ノ最頂ニ登ルト雖モ、直高壹里拾町ニ過キカレハ如何ソ壹里廿一丁卅六間ノ弧背ヲ越テ而シテ望見スルヲ得ン、况ヤ三百里ヲ隔ツル海濱ヲヤ然ルニ既ニ相望見スルヲ得シトハ、如何ニ尙オ海面ハ平坦ニアラスト云ハント欲スルモ豈得ヘケンヤ、然レハ則チ實驗ノ例證數多アリト雖モ上ノ二例ヲ以テスラ海面ノ平坦ナルヲハ無論ニシテ地圓説ノ現量ニ背馳シテ信スルニ足ラサルヲ知ルヘキナリ、

第二章 地球一週ノ證ヲ駁ス

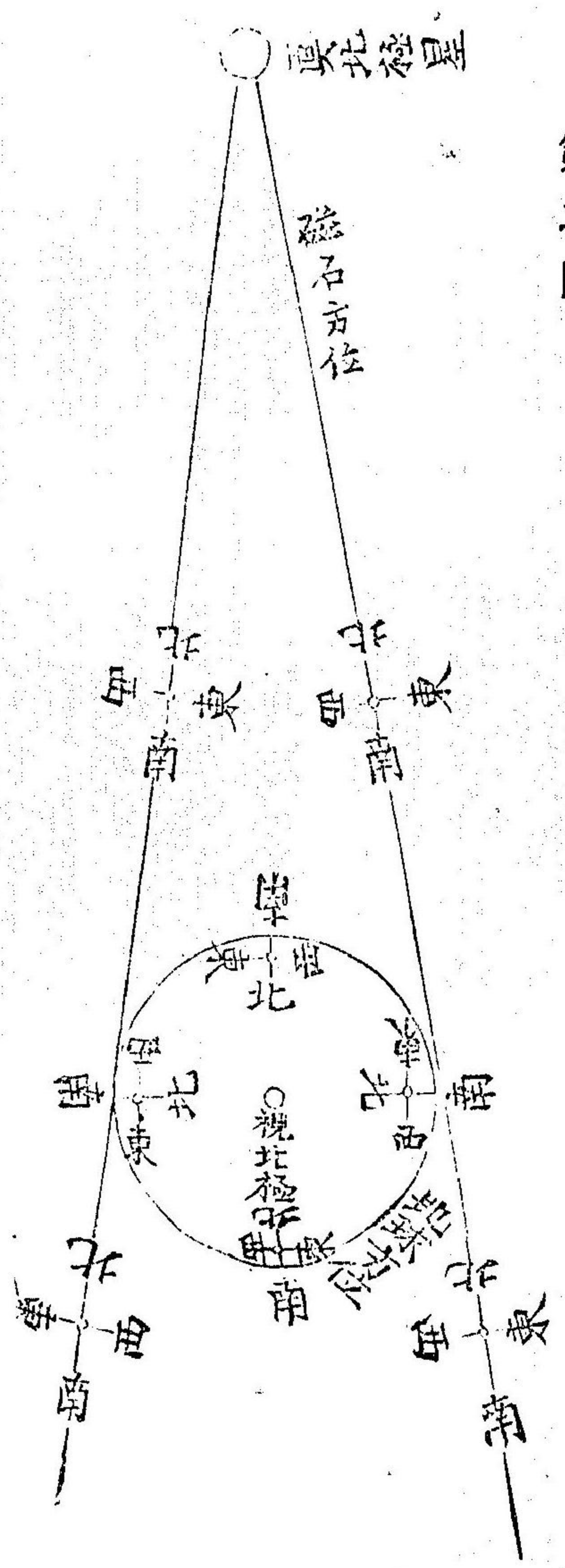
地球説略ニ云中國ヨリ西ニ向フテ進行シ大西洋ヲ過テ亦西ニ向フテ行クハ本國ニ歸ルト、方今地學ニ關スル諸書

皆此ヲ以テ地狀球圓ノ一證トセリ、今近ク彼ノ説ヲ例シ云
ヘハ我日本ヨリ西ニ向フテ進行シテ歐羅巴ニ着シ、後尙其
方向ヲ變セズノ米國ニ到リ尙西ニ進ムルハ、復タ日本ニ
着スト、又日本ヨリ東ニ向フテ解纜シ北太平洋ヲ經テ米國
ニ達シ尙直線ニ東ニ進ムルハ、遂ニ日本ニ復返スルヲ得ル、
コレ則チ地球ヲ上下ニ一週セシモノナリ、以テ地圓ヲ證
スルニ足レリト云ニアリ、○今之ヲ駁シ云ク其日本ヨリ歐
羅巴ヲ過キ米國ニ至ルヲ西ニ向フト云ハ、可ナリ、而ルニ其
次ニ尙西ニ進ムルハ日本ニ返ルト云ハ、コレ唯地球家私設
ノ方位ヲ云ヒタルモノニシテ磁石ノ指ス所ノ天然ノ方位
ニアラサルナリ、何トナレハ米ハ世界ノ極西ニ位シ而シテ我
日本ハ極東ノ國ナリ、然ルニ彼ヨリ此ニ返ルヲ西ニ進ムト

云ヒ、又此ヨリ直チニ北洋ヲ歷テ米國ニ到ルヲ東ニ向フト
云ハコレ東西ヲ誤認シタルモノト云ヘシ○實ニ云ク航海
者ハ必ズ磁石針ニ據テ其方位ヲ取ル若然ラズンハ茫々タ
ル大洋中何ヲ以テ四方ヲ認メシ、然ラハ其西ニ向フト云、或
ハ東ニ向フト云、取ルト云モ、共ニ磁石ノ方針ニ依準スルモ
トナラスヤ、答云是未ダ航海術ヲ知ラサル者ノ問ナリ、何
トナレハソレ航海學ニ於テハ方位ヲ二種ニ分ツ、一ニ地球
方位、二ニハ磁石方位トス、而シテ航海ノ針路ヲ取ルハ地球方
位ニ據リテ磁石方位ニハ據ラサルナリ、其故如何トナレハ
彼ノ航海術書ニ其地球方位ヲ眞方位（彼レ私シニ眞ト名ク
ハケ）ト名ク、其磁石方位ヲ羅針方位ト名ク、而シテ其羅針方位
ノ子午線ハ東偏又ハ西傾シテ眞方位即チ地球ノ子午線ト

一致ナサス、故ニ「アフリカ」ノ南海ニテハ眞方位ヨリ二十
 五度ヲ誤指シ又、グロウンランド海ニテハ四十五度ノ偏差
 (偏差又ハ誤指或ハ東偏西傾トアリトス、如此磁石ノ方位ハ
 云ハ平地球家ノ許サハル所ナリ)アリトス、如此磁石ノ方位ハ
 地球家ノ方位ニ合セサルカ故ニ更ニ別ニ地球ノ形ニ應シ
 テ地球限リニ定メタル一種ノ方位ヲ私設シテ之ヲ眞ノ方
 位トナシ、磁石天然ノ方位ヲ却テ偏傾誤指ト云ヘリ、彼レ既
 ニ磁石方位ヲ誤指トナス以上ハ、何ソ其指ス所ノ方位ニ順
 セシヤ、然ルキハ前ニ云ヘル西ニ向テ販リ、或ハ東ニ向フテ
 販ルト云ハ、コレ彼レカ私設シタル地球方位ノ東西ニシテ
 磁石天然ノ方位ニアラサルヲ知ルヘシ、其二種方位ノ差別
 アルト此第二圖ノ如シ、其地球方位トハ視北極下(即チ赤道
 線ヨリ北緯九十度ノ所)ヲ四方ヨリ抱キ圍ンテ其視北極ヲ

第二圖



四方向^{イッ}處ヨリモ正北トナルヘキ所ト定メタリ、然レモ磁石
 ハ實ノ北極星ヲ正北トシテ指ス故ニ圖ノ如ク二種ノ方位
 自ラ分ラサルヲ得ズ、天然ノ方位ヲ指示スルノ磁石豈人造
 方位ノ爲ニ其性ヲ曲ケンヤ、然ルキハ若磁石針ノ方位ニ順
 フテ西或ハ東ニ進航セシ儘遠ニ原港ニ復販スルナレハコ

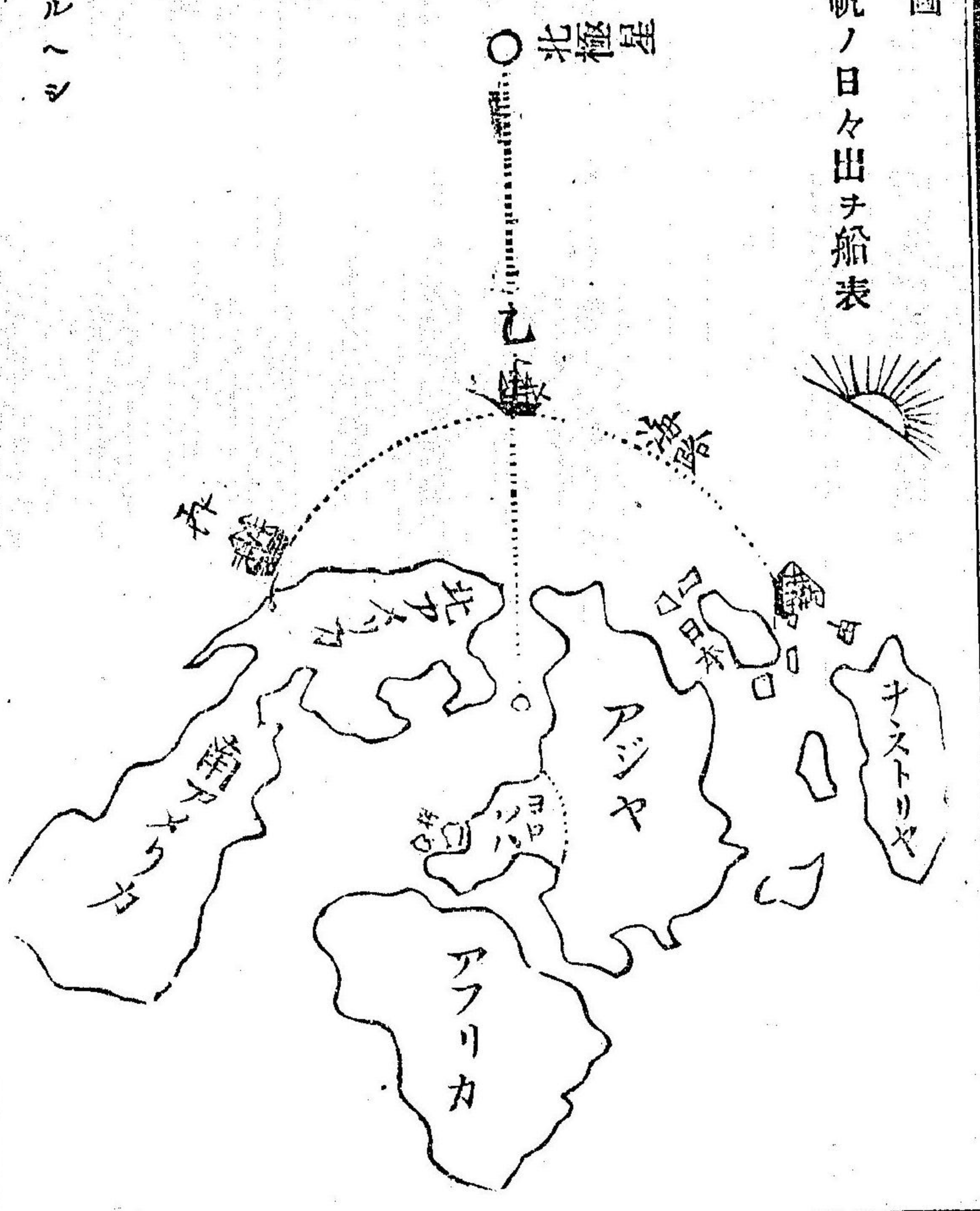
レ上下ニ一週セシモノナルカ故ニ地狀ハ球圓ナルモノナ
 ランカト一往ハ思ヘ凡決シテ實際ニ於テ加樣ナルトアラ
 ス、若シ磁石ノ指示スル方位ノ一方ニ進行スル所ハ其原港
 ナ距離ノ里程愈々進テ愈々遙遠ナル耳其原港ニ旋返スル
 ノ理萬々コレアルヘカラス、然レハ其東西各一方ニ直線ニ
 進行シテ遂ニ其原港ニ返着スト云ハコレ所謂地球方位ニ
 據リタルモノニシテ、言テ換ヘテ之ヲ云ヘハ平面大地ノ視北
 極下ヲ中心トシ、其四方ハ環海ヲ横サマニ週廻セシトニシ
 テ、即チ此圖面ニテ云ヘハ圓輪ハ内外ニ沿フテ環行シタル
 モハト云ヘシ故ニ初ニ日本ヨリ西ニ向フテ航シ尙西ニ進
 ミテ遂ニ日本ニ返ルト云ヒシハ其實ハ磁石方位ニテ云フ
 ハ日本ヨリ南ニ行キ西ニ折レ北ニ曲カリソレヨリ東ニ向

ヒ如此四方ヲ旋回シテ遂ニ日本ニ返リシナリ、又其東ニ向
 フテ進行シテ遂ニ東ニ向フテ返ルト云ヒシハ、之モ磁石方位
 ニテ云フハ上ニ逆回シテ日本ヨリ北ニ向ヒ北洋ヲ西方ニ
 航シ夫ヨリ南方ニ向ヒ東ニ折レ遂ヒニ日本ニ返着セシモ
 ノナリ、然ルル所ハ此航回一週モ適マ平坦海面ヲ横ニ四方ニ
 環回セシモノナレハ、此ヲ以テ地狀球圓ノ一證ニ供フヘカ
 ラカルナリ、○又或ガ難ク云ク日本ヨリ東ニ向フテ米國ニ
 航スル所毎日日出テ船表ニ見、又日没テ船後ニ見ル、コレハ
 地球方位ニテ定メタル東方ヨリ正ク日出テ見ルモノニシ
 テ、コレ航海者ノ實驗セシ所ナリ、然レハコレ眞方位ニ隨テ
 面カモ地球ヲ上下ニ一週セシ證ナラスヤト、今答テ云ク
 此ハ發船ヨリ着港マテノ終始ヲ徹驗ノ云タルモノニアラ

スコソ唯ソノ發錨ノ際、驗セシモノヲ以テ始終共ニ然リト
 シタルモノナリ、其故ハ日出テ船表ニ見ルト云ハ春秋二分
 ノ時ニ限リテ、其モ一兩日間ノトニメ其後ハ決シ船表ニ見
 ルヘキ理ナシ何ヲ以テ之ヲ知ルトナラハ、其日本ノ地ヲ出
 航スルトキハ日出テ正東ニ見ルト雖モ、其ヨリ船ハ日々ニ
 次第ニ北ニ倚ルカ故ニ、凡ソ四五百里ヲ進ムルハ「シベリヤ」
 ノ海角ニ至ル、夫ヨリ北洋ヲ經過シ「カンヂヤツカ」海ヨリハ
 直チニ西ニ進行シ米國ニ達ス此故ニ日出テ船表ニ見ルト
 ハ唯發錨ノ際一兩日ニ限レリ、而シテ二至前後ニ出航スレハ
 初ヨリ日出テ正東ニ見ルトナシ、コレ夏至ニハ日出北ニ倚
 リ冬至ニハ南ニ倚ルカ故ナリ、然レハ此難ハ終始通貫シタ
 ルモノニアラサルナリ即チ第三圖ノ海路ヲ見テ知ルヘシ

第三圖

甲ハ横濱ヨリ出帆ノ日々出テ船表
 ニ見ル圖
 乙ハ北洋ヲ北ニ
 進ミテ北極星ヲ
 我右方ニ見ル圖
 丙船ハ米國サン
 フランシスコニ
 著スルノ圖
 又桑港ヨリ日本
 ニ飯來スル片ハ
 之ニ反例シテ知ルヘシ



○問云上來ノ所辨ヲ聞クニ、航海者ハ都テ地球方位ニ依テ
方角ヲ取り、磁石ヲ以テ誤指トセハ何故ニ彼ノ羅針盤ヲ船
頭ニ備ヘテ以テ航海最要ノ具トスルヤ、答云杳渺タル太
洋中若此物ナクンハ何ヲ以テカ方位ヲ辨セン、故ニ此磁針
ヲ目的トシテ其磁針ト地球方位トノ差ヲ測リ以テ各地ノ
地理ヲ知ル爲メニ用ユル耳ニシテ、直チニ其方位ニ從フテ
進行スル爲メニ裝置シタルニハアラサルナリ、○問云磁石
何カ故ニ地球方位ヲ指サルヤ、答彼ノ地球圖ニ載スル所
ノ北極ノ天頂ニ北極星アリト定メタルモノハコレ曆學家
測算ノ便ニ假設シタルモノニシテ、之ハコレ人造ノ北極星
ニシテ、其實ノ北極星ハ此處ニアラスシテ遙カニ最北ノ天
ニ掛レリ、而シテ磁石ハ此真北極星ヲ指スヘキ天性ヲ有スル

カ故ニ彼ノ人造ノ北極星ヲ指サルナリ、○問云彼ノ地球圖ニ
載セタル北極ハ唯コレ測算ノ便ニ假設シタルモノニシテ、其
天頂ニハ實ハ北極星ナシト云フ何ノ證アリテ之ヲ云ヤ、
答云其證一ニアラス、先ツ一ニハ我日本ノ東洋ヨリ北洋ヲ
經テ米國ニ向フモノ皆悉ク北極星ヲ右ノ天ニ見テ左ノ天
ニ見ズ、第三圖乙船ヲ見ルヘシ地若シ圓形ナレハ必ス之ヲ
左ニ見テ決シテ右ニ見ルヘキ理ナシ、是レ地球家ノ立ル所ノ
「ペーリング」峽内ニ北極星ノ地ナキコトノ一ノ明證ナリ、二
ニハ英人十七ヶ月ノ間北極星ノ直下ヲ探索シテ、遂ニ其極
下ノ地ニ到ルヲ能ハス、コレ「ペーリング」峽内ニ極下ノ地ナ
キニ明證ナリ、北極下探索ノ「朝野新聞」一千七百七十
一月廿三日ニ記載シテ云ク、英國ヨリ北極探索ノ爲ニ趣キタ
日發刊

ル二船ハ「アレンルト」號一艘「シスコベリ」號一艘、遂ニ其目的ヲ達スルヲ能ハス、我明治九年十月廿七日ニ「アレンルト」號ハ「レンチヤ」ト云ヘル港ニ着シ、翌日「シスコベリ」號モ亦着シタリ、時ニ右二船ノ歸ヘリノ遅キ故其安否ヲ問索ノ爲メ「パンドラ」ト云ヘル船ヲ遣シタル所、右ノ二船ニ廻リ合ヒ共ニ同ク本國ニ着シタリ、蓋シ此二船ノ北洋ニアルコト凡ソ十七ヶ月ニテ其間タ種々ノ艱難ニ及ヘリ、而シテ其二船ノ士官曰ク北極ハ決シテ近ツクヘカラス、古來諸國ヨリ北洋ニ航スルモノ極下ノ氷山ヲ開拓スルナドノ説ノ如キハ全ク妄言ナリ、我ソノ實ニアラサルヲ證スヘシ、又先年米國人、北極下ニテ陸地ヲ見タルトイヘルモ決シテ實ニアラス已上云々三ニハ北極下ノ地若シ地球圖ノ如クナレハ英ヨリ僅カニ九百里位ナル故、

彼ノ航海熟達ノ人必ス幾度モ其ノ地ヲ驗測シ置クヘキ等ナリ、然ルニ古ヘヨリ未ダ一人モ其極下ノ地ニ到リシモノナキハコレ「ペーリング」峽内ニ極下ノ地ナキ三ノ證ナリ、之ニ由テ此ヲ觀レハ彼ノ地球圖上ノ北極ハ只コレ測算ノ爲メニ仮リニ指定シタルモノニシテ其實ハ彼ノ天頂ニ北極星アルニアラサルヤ知ルヘシ、又其北極下探索ノ爲メ十七ヶ月間ヲ費セシニ就テモ眞ノ北極下ノ地ハ遠ク數万里已上ニ在テ、此大地ハ一地球如キハ小部分ニ止マラスシテ、其廣漠平坦ニハ容易ニ四方ハ際涯ヲ究ムヘカラルヲ推シテ知ルヘキナリ、○問云上來二種方位差別ノ説明ニ由リ、彼ノ地球ヲ一週セシト云モ其實ハ一週ニアラヌシテ、平面環海ヲ横週セシコトナリシハ稍々領解セリ、然レモ此地球一

週ノコハ航海者ノ常ニ談スル所ナルカ故ニ猶才具サニ之
 ナ討尋セント欲ス、抑洋説テハ米ヨリ日本ニ來ルニハ太平
 洋ヲ通行スルト云ト雖モ北洋ヲ通スルト云ハス、然ルニ今
 圖ノ如ク北洋ヲ通スルト云ハコレ汝カ臆度ナルヘシ此間
 地圓ノ太平洋ヲ以テ平面 答北洋ヲ通行スルト云モノ、確
 ノ北洋ヲ通スト云ナ難ス 證アリテ更ニ臆度ヨラス、今略ノ三證ヲ舉ケンコ、一ニ明
 治六年ノ外國新聞ヲ見ルニ、堪察加ヲ經テ米ノ桑港ニ至ル
 ニハ必ス北極星ヲ我右ノ天ニ見ルヘシ、又桑港ヨリ堪察加
 ニ向フキハ北極星ヲ我左ニ見ルヘシト云ヘリ、此文ニ既ニ
 堪察加ヲ經ト云フハコレ正ク北洋通行ノ事實ノ一證ナリ、
 又明治十二年九月廿日ノ東京日々新聞ニ北洋遠航ノ記事
 ナ載スス#デン瑞典ノ博士ノルデンスキジヨルヤン氏ハ夙ニ北洋

遠航ノ志ヲ抱キ、十一年七月四日瑞典ノ港ヲ發シ、數月間氷
 海ニ碇泊シテ、翌年北洋ヲ經歷シテ遂ニ横濱ニ安着スト云、
 此中瑞典ト云ハ歐洲最北ノ國ナル故北洋ニ出ルニハ「グル
 ーランド」ノ氷海ヲ經サルヲ得ズ、其カ爲ニ數月ヲ歷タレ
 凡漸ク暖氣ニ及テ、堪察加ニ出テ北洋ヲ東へ通航シテ遂ニ
 日本ニ着シタルモノ是北洋通行ノ二ノ證ナリ、又同新聞ニ
 云ク西班牙及ヒ葡萄牙人カ諸方ニ航行センコヲ謀リ航路
 ナ三方ニ分ツ、一ハ航路ヲ北極ニ取り、二ニ亞米利加ノ北ヨ
 リ西ニ向フニハ大西洋ヨリ航路ヲ東北ニ取り西比利亞
 ノ北岸ヲ沿テ進ムト、コレ正ク堪察加ヨリ北洋ヲ東へ航シ
 テ日本ニ進ムモノニ北洋通行ノ三ノ證ナリ、此等ノ説ニ
 據テ考フレハ、堪察加ヨリ南方ハ氷海アル故通行シ難キ處

アレヒ、堪察加ヨリ北方ハ大平洋即チ北洋ナレハ何ソ航通チ憚
 ラン、此故ニ北米ヨリ日本ニ航スルヤ、必ス堪察加ノ北洋ヲ
 經テ西比利亞ノ北岸ヲ沿テ日本海ニ遷ルコト實驗已ニ如此、
 誰カ之ヲ疑ハン、○問今所引ノ新聞ニ北洋ヲ通スルト云モ
 ノ、コレ全ク地圖ノ上ノ北太平洋ニシテ平面說ノ北洋ノ事
 ニ非ス何トナレハ西洋各國ニ於テ未タ平面說ヲ言ハズ、然
 ルチ今何ソ獨リ之ヲ言ハンヤ、答西洋各國一般ニハ未タ
 平面說行ハレザレヒ、介石翁ノ記事ニ據レハ米利堅及ヒ英
 國ニ於テハ近年地動說ヲ改メテ天動說ヲ主張スルモノ盛
 ニ起ル由彼ガ新聞ニ見ヘタリ、又地動說ノ中ニ地球遂ニ旋
 リ止ムノ說ヲ出スモノアリ、又地球ノ周圍ニ日月五星抵觸
 シテ地球碎ケ破ルト云說モアリト云ヘリ、然レヒ予ハ其說

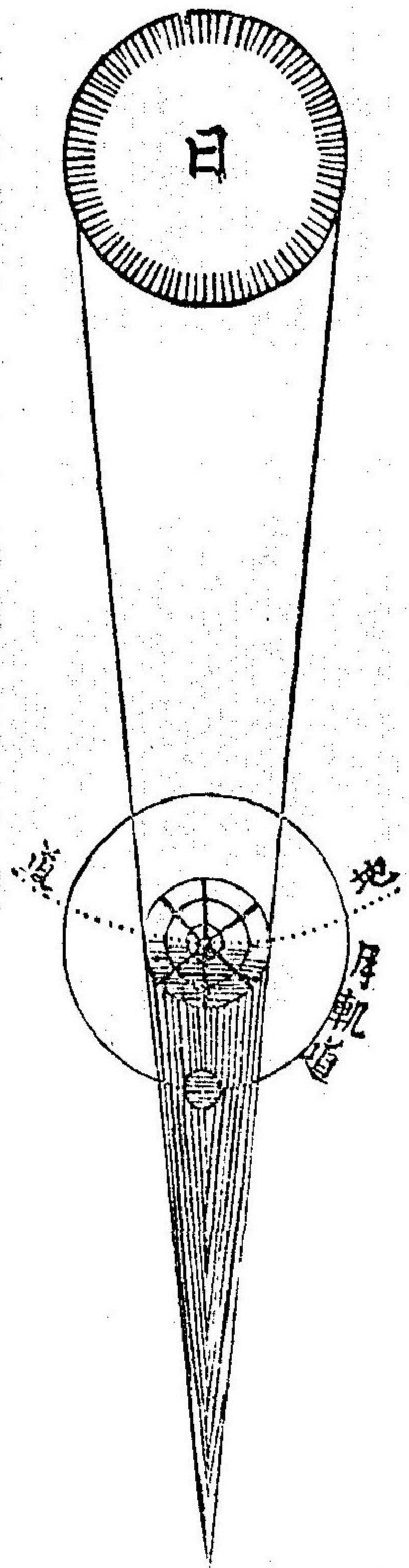
ノ珍奇ナルヲ訝リテ未タ之ヲ信セサリシニ、一昨明治十八
 年八月廿一日ノ奇日新報ヲ見ルニ米國ノ博士ウイリヤン
 カーペンター氏ハ、近年大地ハ平面ニシテ球狀ニアラス太
 陽之カ四邊ヲ輪廻スルモノナリト持說ヲ以テ他ノ地動說
 ナ駁撃スト、予之ヲ覽テ初メテ介石翁ノ說ノ虛ナラザルヲ
 信ス、彼ノ「カーペンター」氏ハ高名ノ博士ニシテ此說ヲ吐ク
 豈ニ往ノコナランヤ、必ス實驗發明スル所アリテ而ル後之
 カ說ヲ主張スルナルヘシ、此ニ由テ考レハ先ニ北洋通行ト
 云モ全ク平面說ノ北洋ニシテ地圖說ノ北洋ニハ非ルベシ、○
 難ノ云大地平面ト執スルナラハ、彼ノ北洋ハ亞細亞ノ最北
 ニ當ル西比利亞ノ北海ナル故、日道ニ遠ク強寒氷結シテ冬
 月ニハ航行スル能ハサル理ナレヒ、航海者ハ四季ニ論ナク

通行スルモノ云何、答云コレ未タ地理ニ達セサル人ノ問ナリ、何トナレハ北洋ハ強寒水結ノ地ニアラス、透察加ヨリ北ハ太平洋中ニノ近傍ニ高山累重スルヲナキ故水海アルヲナシ、^二グールンランド海ノ如キハ大山綿環シテ其強寒猛烈ノ氣海上ニ推出テ、海水ヲ凍ラシムル故ニ水海トナル、瑞典等ヨリ北へ通セントスルルハ必ス此水海ノ爲ニ船路ヲ遮ラル、然レハ透察加ヨリ北へ出レハ即チ北大平洋ナル故西ノ方米ニ行クモ東ノ方日本ニ航スルモ何ノ妨カアラシヤ此ニ就テ尙論スヘキヲアレハ爰ニ盡キズ上來略ノ地球一週ノ証ヲ駁スル此ノ如シ、

第三章 月蝕地影ノ證ヲ擢ク

地球説略ニ云月蝕ノ時一ノ黒闇アリテ月光ヲ遮蓋ス此黒

闇ハ即チ是レ地球ノ影ナリ、此時日ト月ト相對ノ地球適々中間ニ在リト、此文月蝕地影ノ想像説ヲ成スルニ地動ノ説ヲ持來リ地球適々中間ニ在リト云フ、コレ邪ヲ成スルニ邪ヲ以テスルモノ豈之ヲ默許ニ付スヘケンヤ、故ニ今其地動ト地影ノ兩邪説ヲ併擢セント欲ス、先輩既ニ之ヲ破スルニ數多ノ難ヲ出タス、予按スルニ此ハ多難ヲ須ルニ及ハス、唯彼カ出ス所ノ第四圖ノ如キ圖解ノ妄ヲ駁破シテ足レリトス、此圖ニ就テ三難アリ、一ニ太陽ヲ大ニ畫クノ難、二ニ太陰ヲ小ニ畫クノ難、三ニ地球ヲ中間ニ置クノ難、諸曆書ヲ閱スルニ日ト月ト其形チ同等又日ヲ小ニシ地ヲ大ニ圖スルモノアレハ、今圖ノ如ク日ヲ至大ニ畫クモノナシ、天經或問ノ日月交食ノ圖ハ其形量月ト同等ナリ、又物理楷梯ノ第一百十



八圖(日光射地面圖)ハ日ヲ小ニシテ地球ハ之ニ廿倍餘大ニ畫ク、此ノ如ク彼カ出ス圖一定ナラス、殊ニ今圖ハ世人ヲ眩惑スルノ邪計ヲ畫クモノニシテ、豈之ヲ正理ヲ畫クモノトセシヤ、仮令ヒ其實体圖ノ如ク地球ヨリ大ナルモノタリト今地上ヨリ見做ス所ノ如ク七八寸ノ小形ヲ畫クヲ至當ト

ス、然ルヲ何ソ巴カ説ニ協ハシメントテ恣ニ之ヲ至大ニスルヤは一ノ難ナリ、次ニ物理楷梯月蝕論ニ云月ノ直徑八百八十四里餘ニシテ地球ノ距ルト近キ故大サ殆ト太陽ニ同シキヲ見ルト云ヘリ、コレハ地上ヨリ見做ス所ノ實見ヲ説ク、然ルニ今圖中ニ入ル月ヲ至小ニ圖スルモノハ何ソヤ、コレ今ノ所謂殆ト太陽ト同シキヲ見ルト云文ト相違スルニアラスヤ、又現在月体ヲ見ルニ太陽ト相等シ、而ルニ今之ヲ至小ニ畫クハ豈現量相違ニアラスヤ、是ニ難ナリ、次ニ地球ヲ日月ノ中間ニ圖スルモノハ、コレ彼ノ歐洲ノ迦利例於カ邪推妄立シタル地動説ヲ畫クモノナリ、而シテ天地ノ實形ハ地ハ常ニ下ニ固着シ、日月星辰ハ高ク天ニ運旋スルモノコレ實驗ノ聖説ナリ、然ルニ今日月ノ中間ニ地球ヲ置クモノ

甚タ非ナリ、此故ニ大聖世尊ハ遐カニ末世ニ地動説ノ起ラ
 シテ知召シテ、立世阿毘曇論第一地動品中ニ四箇ノ破文
 ナ懸記シ玉ヘリ、其第三ニ射不至^{アツタヒ}期ト説クモハ、即チ當今
 ノ地動説ヲ摧クノ鎮鎚ナリ、其意ハ地球ノ全周一万百九十
 三里トシテ一晝夜ニ一旋轉スルキハ、人ノ一息間ニ八百五
 十間ヲ進ム、又人箭ヲ射ルキハ一息ノ間ニ行クニ僅カニ五
 十間ニ過キサル故地球ノ自轉ハ此ヨリ早キニ十六倍餘ナ
 リ、此故ニ矢ハ弓ヲ離レテ空ニ在テ五十間行ク間ニ、人ト期
 トハ地球ニ附着シテアルユヘ、矢ヨリ速進スルニ十六倍餘
 ナリ、故ニ之ヲ射不至^{アツタヒ}期ト説クマフ、コノ破斥ニ據ルトキハ
 地動説ノ妄誕不稽ナルコト知ルヘシ、^八息一晝夜ニ二万七
 千ナリ、故ニ之ヲ射不至^{アツタヒ}期ト説クマフ、コノ破斥ニ據ルトキハ
 百二十五里トナルヲ十六倍スレハ幾^ニシト地球一晝夜ノ

自轉ノ里^ニ○返難ノ云物理誌ニ據ルニ、地球ノ周圍ハ盡ク輕
 數ト合フ、○返難ノ云物理誌ニ據ルニ、地球ノ周圍ハ盡ク輕
 浮氣ヲ以テ包ム之ヲ空氣又ハ大氣ト名ク死色ニシテ見ル
 ベカラズト云ヘドコノ物ナケレハ人獸草木生活スル能ハ
 ズト云ヘリ、然レハ空氣常ニ大地ヲ包ム故ニ、箭、弓ヲ離レ直
 ニ此空氣ノ中ニ入り、空氣亦地球ト共ニ廻レハ箭モ亦廻ル
 理ナル故ニ必ス期ニ中ルヘシ、若ソレ地球、空氣ト共ニ廻ルト
 スル件ハ嚮ノ懸記ノ説モ當ラサルヘシ如何、答云空氣ハ
 仮令ヒ地球ヲ包ムレ、其空氣ノ性ハ柔弱至輕ニシテ遲緩ナ
 ルモノ故地球ノ速疾ニ付添テ動轉スヘキモノニアラス、而
 ノ全虚空至ル所トノ充滿セサルハナシ、故ニ地球自ラ其間
 ナ運轉シテ抄時間モ空氣ヲ離ル、トハナキユヘ、是ヲ以テ
 空氣地ニ添テ轉旋セズト雖モ地球至ル所空氣アリテ呼吸

スルカ故ニ動植皆生活スルヲウケル、今之ヲ例セハ魚ノ水中ニ在テ八方上下ニ顛倒スレトモ水ハ其魚ト同ク八方上下ニ顛倒スルヲナキナリ、コレ魚ハ動キテ水ハ静ナレトモ魚常ニ水ヲ呼吸ノ以テ生活ス、此例ニテ知ルヘシ人ト地トハ動轉ノ氣ハ静ナレトモ能ク生活シウルヲ、此故ニ箭ハ弓ヲ離レテ桑弱ノ空中ヲ行ク故遅シ、人ト期トハ速疾ナル地球ニ着キ乍ラ回ル故速ナリ、故ニ射不至期ト云コレ的難ナルヘシ、○難ノ云人アリテ急ニ走ルキハ向面必ス風ニ觸ル、此風他ヨリ來ラズ必ス空氣ノ動搖シタルモノナリ、然レハ地動クキハ氣亦動クヲ必セリ、曆書中往々止靜ナルヲ氣ト云激スルヲ風ト名クト云ヘリ、然レハ氣ト風トハ其体一物ナルキハ、其激スル風、地球ト共ニ旋ル故、箭必ラス期ニ中スヘシ

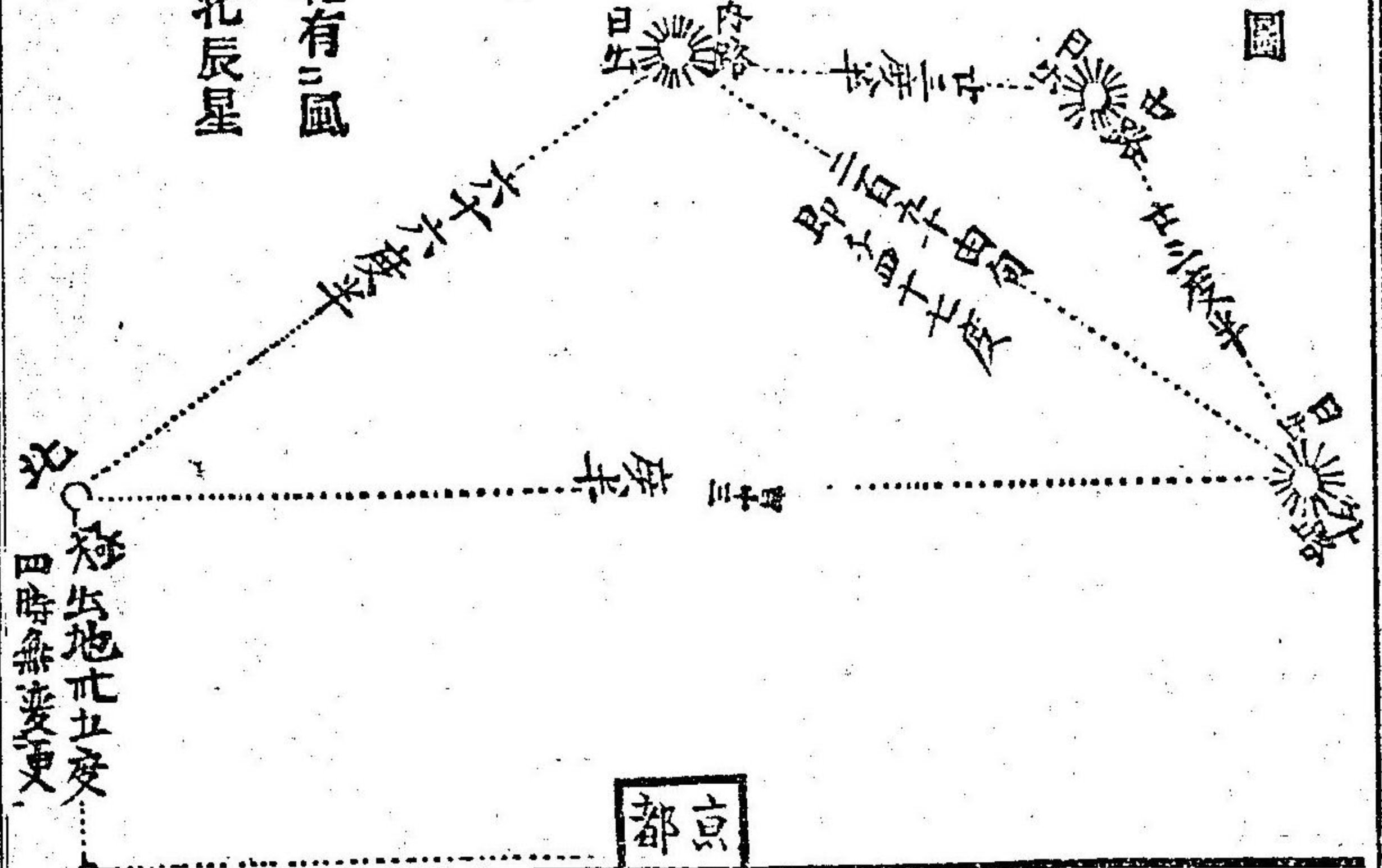
若激シタル風ハ止リテ回ラズ、地ノミ回ルトセハ地上ニ着スル家藏人物等皆風ニ觸レ抵リテ倒レ崩ル、理ナルヘシ、爾レトモ現量ニ倒ル、モノナキヨリ見レハ空氣モ地ト共ニ動轉スルモノトスヘシ、然ルキハ彼ノ破斥ハ猶不可ト云フヘシ如何、答云汝ハ氣風一物ノ誤解ヲ執スル故ニ此ノ如キ妄難ヲ起セリ、今汝カ爲ニ現量及比量ヲモテ示サン、初ニ現量ノ中ニ五アリ、一ニ風ハ動性ニシテ強勇ナル故大樹大厦ヲモ壓倒スルノカラアリ、氣ハ弱靜ノ性ナルユヘ燈燭ヲモ消スル能ハス、二ニ風ハ物ヲ乾ス性、氣ハ物ヲ濕ス性、三ニ風ハ時トシテ起ル氣ハ常住不變、四ニ風ハ質碍アルユヘ戸障子ヲ隔ツキハ其内ニ容ルヲ能ハス、氣ハ粗暴ノ質碍ナキ故物ヲ隔ツキ其内ニ透入ス、五ニ風ハ積ニ旋ル性アリ氣ハ上

ニ昇ル性アリ、霧烟湯氣ノ類皆上昇スルコレ氣ノ堅ニ昇ル
 徴ナリ、又風ノ横ニ回ル徴ハ人風頭ニ立ツルハ之ヲ向背左
 右ニ受クルモノコレナリ、以上氣風別性ノ現量ナリ、又博物
 新篇ニ赤道以南ノ風ハ常ニ定テ東南ヨリ吹キ、赤道以北ノ
 風ハ恒ニ定テ東北ヨリ吹キ、四季恒ニ替ラサル風ナルカ故
 ニ海客之ヲ恒信風ト名クト云ヘリ、然レハ此風ハ尋常ト異
 ナレハ洋説ト雖モ氣ノ激シタル風トモ名ケガタシ、予ニ氣
 風同別ニ就テ精細ナル論アリ、他日便チ得テ述セン、次ニ比
 量トハ上ニ述スル水ト魚ノ如キ以テ例トナスヘシ、博物新
 篇ニ人畜ノ空氣中ニ棲息スルヲ例ノ魚ノ水中ニ處スルカ
 如シ、魚水ヲ頼ンテ育スト云フモノ是ナリ、然レハ則チ大地
 ト空氣トハ共ニ同ク旋回スヘキモノニアラサレハ今此射

不_レ至_レ期トイヘル懸記ノ難破實ニ的中スルモノト謂フヘシ、
 ○又有カ難_ク云、彼ノ地動説ハ推量ノ説ニアラス、種々ノ精
 巧ナル器械ヲ以テ地球ノ自轉スルヲ實驗シタル説ナル
 故、之ヲ現證ノ説トス、平地家ノ説ニテハ實驗現證ナキ故ニ
 信シ難キニ似タリ如何、答平地家ノ説モ亦實驗現證アリ
 テ多シト雖モ、略メ其一ニテ拔萃シテ彼カ現證ニ違スルモ
 ノト對向スヘシ、即チ第五圖ニ注スル如ク、經論ノ説ト今現
 ニ天ヲ仰テ見ル所ト少異ナキハコレ實驗現證トスヘシ、
 即チ立世論ニ天ノ三路ヲ説キ、内外ノ距離二百九十由旬ト
 ス、之ヲ西洋説ニハ二至大距四十七度トスルモノト里數ヲ
 測算スルニ殆ント暗合ス、此算法次ノ顯正又太陽出沒ノ方
 位ヲ驗スルニ、春秋二分ハ正東ニ出テ、正西ニ沒シ、夏至ニ

第五圖 釋教說現量相應ノ圖

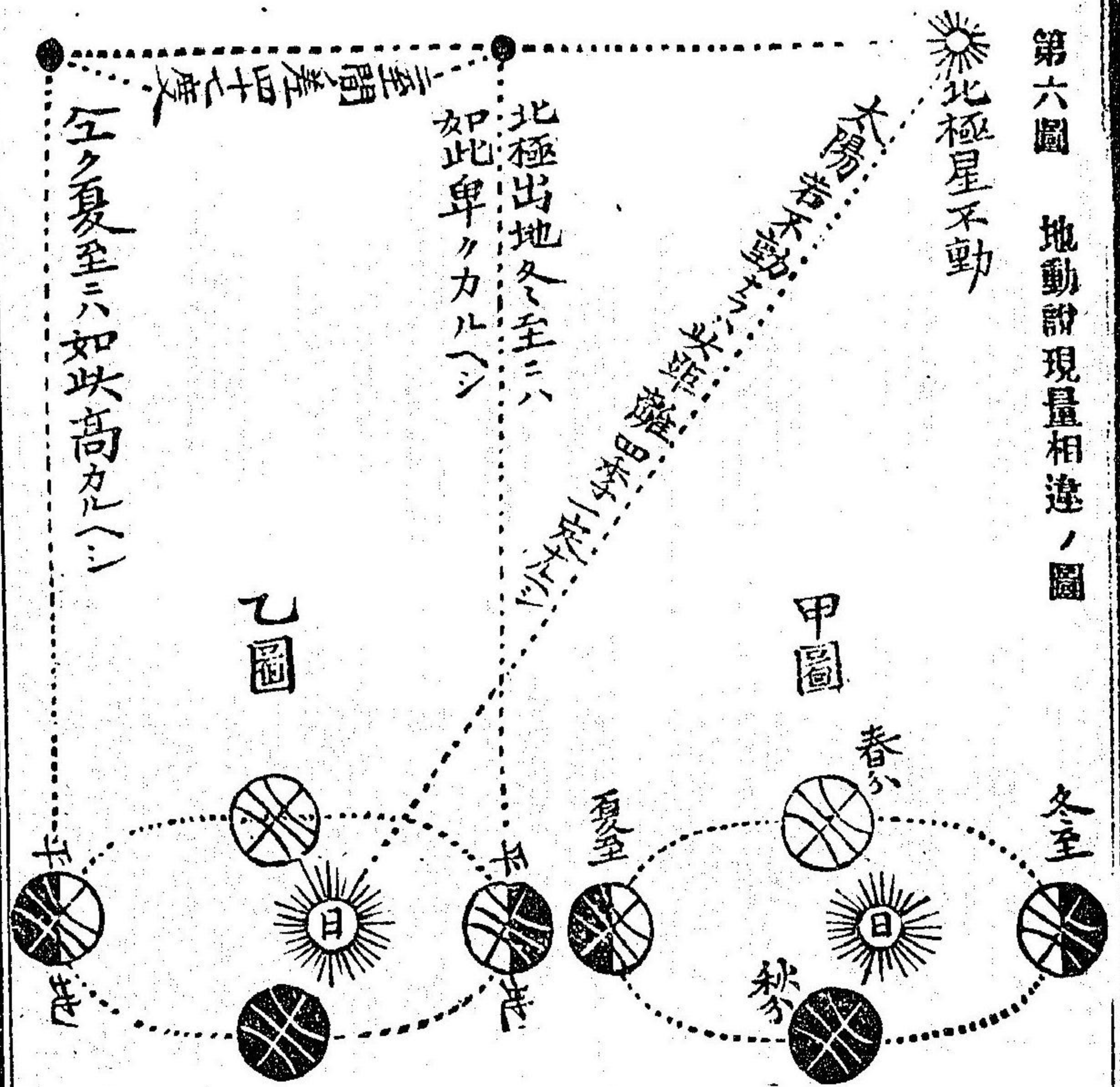
立世論云以衆生業增
 上緣故故有風輪恒吹
 廻轉以風吹故日月等
 宮殿廻轉不息、又曰
 從內路至中路百四十
 五由旬從中路至外路
 百四十五由旬、日月於
 此中行無有減長、文
 正法念經觀天品云、南閻浮提北有風
 輪、持北方星、輪轉不沒、見北辰星
 北斗七星、常現不沒、文



ハ其ヨリ
 廿三度半
 北方ニ出
 テ、冬至ニ
 ハ正東ヨ
 リ廿三度
 半南方ニ
 出ルヲ見
 ル、コレ現
 量ニシテ
 方サニ經
 說ト合符

又北極星ノ一ハ正法念經文如振ニニ出ル又七佛所說神
 呪經ニハ我北辰處閻浮提中衆星最勝ト說ケリ、二經共ニ北
 辰星トアルハ北極星ノ一ニ、即チ吾等每夜北方ニ見ル所
 ノ一ノ不動星是ナリ、偕此不動星ノ出地ヲ測ルニ、京都ニテ
 ハ夏至モ冬至モ卅五度ニ曾テ差アルナシ、(其餘何處ニテ測ルモ四
 時皆同)コレニ由テ考レハ吾所住ノ大地モ北極星ト共ニ不
 動ナルヲ豈ニ疑ヒアランヤ、又此北極星ト夏至ノ太陽トノ
 距離ヲ京都ニテ測量スルニ六十六度半ナリ、又冬至ニハ百
 十三度半ナリ、如此ニ至ノ間ニ四十七度ノ差チ生スルヨリ
 考フレハ太陽ハ是動物ニシテ大地ト北極ハ是不動物ナル
 下之ヲ然ラスト言ハント欲スルモ豈得ハケンヤ、然レハ則
 チ平地家ノ說實驗ニ徴シ現量アルヲ信スルニ足レリ、次ノ

第六圖 地動說現量相違ノ圖



第六圖ハ彼ノ說ノ現見ニ違スルノ非ヲ示ス、先ツ甲圖ノ如ク地球ノ軌道ヲ楕圓トスルニハ、夏至ニハ地球南ニ倚ル故ニ日ニ遠ク、冬至ニハ地球北ニ倚ル故ニ日ニ近シ、又春秋二分ハ圖ノ如ク極メテ日ニ接近ス、然ルニハ二分ノ如キハ極熱ニシテ、冬至ハ暑

中、夏至ハ寒中ナラサルヘカラス、然ルニ現量此ニ相違スルニハ、此楕圓ノ說豈妄ト云ハサルヘケンヤ、又次ニ乙圖ノ如ク若シ太陽モ北極星ノ如ク動旋セザルモノトセハ此二個ノ不動物ノ距離万古一定ニシテ四季ノ變更ニ關シテ決シ其間ニ長短ノ差ヲ生スルノ理萬々コレナキ理ナリ、然ルニ次上第五圖ノ如ク、現在實驗ニ二至ノ間ニ四十七度ノ差ヲ生スルヨリ見レハ、彼ノ二個ノ内何レヲカ動体トセサルヲ得ズ而シテ北極星ノ不動物タルハ内外諸曆家ノ共許スル所ナレハ、推シテ爰ニ至レハ是非ニ日体動轉シテ南北ニ往來スルカ故ニ、此遠近ノ差ヲ生スル也ト云ハサルヲ得ス、斯ク理解現證ヲ以テ論シ來レハ、太陽ハ必ス南北ニ動旋往來スルモハニハ、彼ハ地球家ハ太陽不動ハ說ハ遂ニ立タサルナリ、又

次ニ北極星ノ出地ヲ測ルニ、地球若シ所謂軌道ナルモノヲ
 轉旋セハ、冬至ニハ地球北ニ倚ル故ニ圖ノ如ク北極ノ出地
 卑ク、又夏至ニハ南ニ倚ル故ニ冬至ノ時ヨリ四十七度高カ
 ルヘキ理ナリ、然ルニ現在試ニ京都ニ於テ之ヲ測量スル
 ニ、二至何レノ時ニ於テモ卅五度ニ一定ス、此ヲ以テ之ヲ考
 レハ、吾此大地モ彼ハ北極星ト同ク永遠不動ニシ、其位置ヲ
 變更スルコトナキヤ、現象ニ於テ既ニ昭々平タリ、上來ノ所
 論ハ原ト月蝕地影ノ妄證ヲ破スルヨリ出テ、其間稍々論
 端ヲ分テ説キ、爰ニ至レハ彼カ誇稱セル太陽不動ノ説モ、地
 球旋轉ノ理モ、併セテ現量相違ノ臆度ニ墮シ畢レハ、此月蝕
 地影モ亦想像域中ノ妄説ニシテ深ク辯論ヲ費スニ足ラサル
 ナリ、上來略ノ第一破邪篇竟ル

第二 顯正篇

護法資治論不染居士著ニ曰ク、外道詰難釋氏有三、一者三世輪廻
 無有、二者天堂地獄皆寓言无實、三者説天地不合度數、其一
 其二古德已辯之、其三古德之辯未及此、我恐後世佛家大難
 自天文地形而始、ト宜ナル哉、居士ノ識言、予モ亦竊ニ恐ル
 早晚必ス此難起ラン、トナ、然ルニ方今吾同胞中ニ於テ爰
 ニ注想セザルモノ頗ル多シ、蓋シ此輩謂ヘラク經論中天
 象ノ度數ヲ説ク甚タ粗漫ナリ、到底洋説ノ精微ナルニ勝
 ル能ハスト、夫然リ豈ソレ然ンヤ、夫レ佛ハ真乘ヲ説クヲ
 以テ出世ノ本意トシ、世俗論スル所ノ天文曆理等ハ、其主
 トスル所ニアラス、故ニ其説甚タ麁ナリ、且ツ西域ノ俗頗
 ル天文曆數ニ精シ、故ニ此等ノ説ハ悉ク彼等ニ讓ル耳、大

聖豈世間ノ義ニ闡フシテ之ヲ詳ニセサルモノナランヤ、然レレ皆テ度数ノ一ヲ説玉サルニハアラス、其基礎トナル緊要ノ一ハ經論中ニ散説セリ、下ニ引クカ如シ、而シテ此度数ノ如キハ洋曆ト雖モ其地球上ニ畫ク如キハ實地ニコレアルニアラス、何トナレハ彼カ地理書ニモ云ヘル如ク地球表面ノ如キ固ヨリ線ヲ畫スル能ハスト雖モ仮ニ虛線ヲ設ケテ測算ニ便スルヲ得ヘシト、此中虛線ヲ設ケルトハ、地球上ニテ直チニ地ノ度数ヲ知ルトハ能ハサル故、天度ヲ以テ仮ニ地ニ配シタルヲ云フナリ、此故ニ曆象篇ニ云、西儒以天文配諸地以辨方隅別於里程有益知地理不少矣ト、然レハ天度ヲ以テ地ニ配シ、而シテ里程ヲ分ツモノトス、故ニ航海者ハ常ニ天度ヲ測量スルヲ要トス、

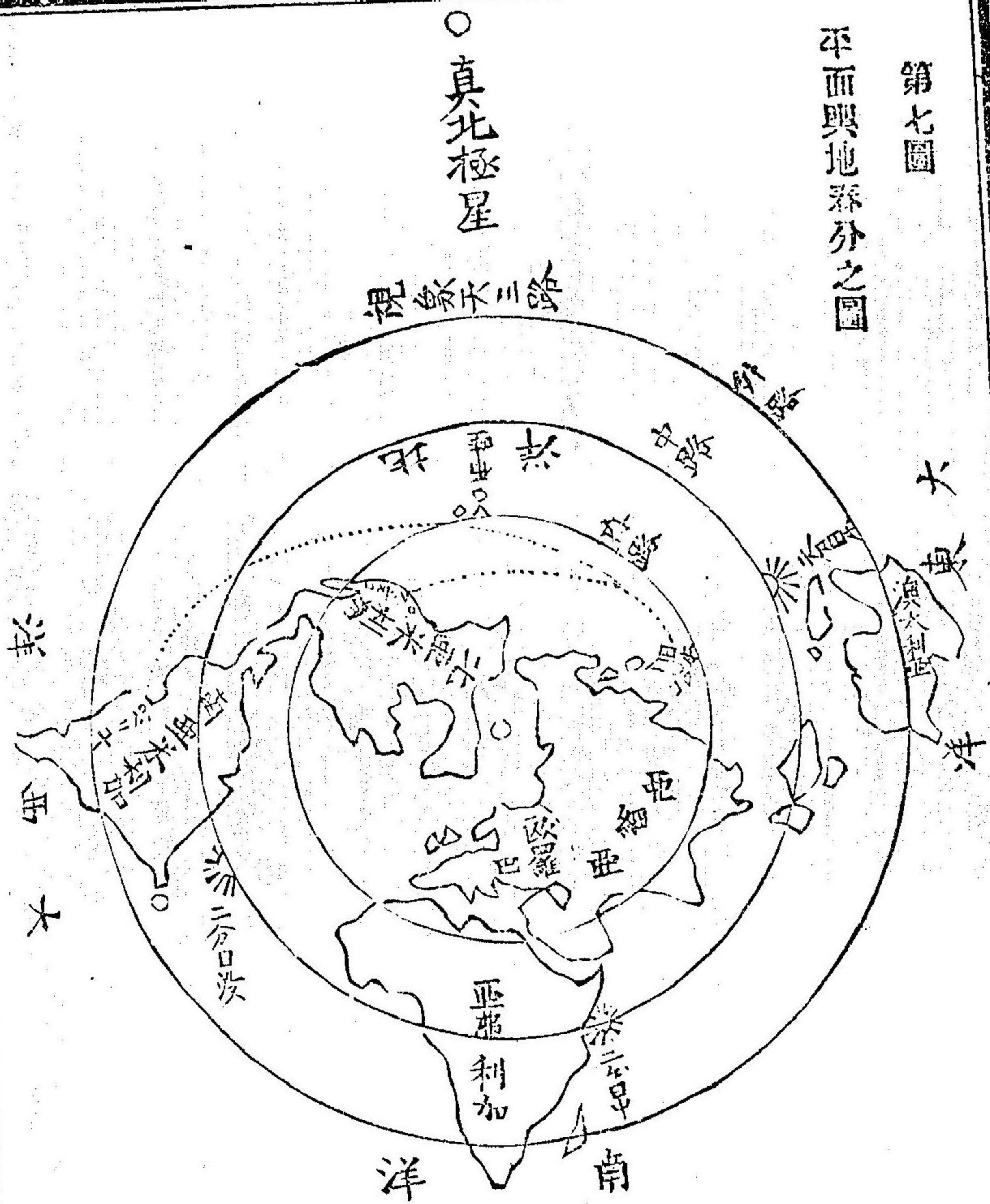
洋曆家ノ度数ヲ設クル原因ソレ如此、今吾輿地圖ニ於テモ亦直チニ地上ノ度数ヲ知ルヲ能ハサル故、經論所説ノ天度ヲ地上ニ配シ、以テ吾釋教所説ノ天象地理ノ誤リナキヲ知ラシメント欲スルナリ

第一章 平面輿地及ヒ天度縮象ノ理ヲ解ス

今章ノ中分テ二トス、初ニ地理、後ニ天象、初メ地理ヲ解セントスルニ諸經論ニ據ルキハ、廣ク大千界ニ亘ルト雖モ、今ハ唯一須彌界中ニ於テ、吾南閻浮提洲内ノ人等ノ地理ノミヲ圖解ス、俱舍論等ニ云ク此國ノ廣サ東西北ノ三方ハ各二千里、南ノ一方ハ僅ニ三由旬半ト、而シテ此中央ニ當ル所ハ、即チ「グルーランド」ノ海岸ニシテ即チ假北極下是ナリ、此國ハ海陸共ニ平坦ニシテ球狀ニアラス、論ニ云ク閻浮提ノ地

第七圖

平面輿地考分之圖



四十四

形殆ント
人面ノ如
シ、又三角
コ似タリ
ト説キタ
ルハ蓋シ
亞細亞、歐
羅巴、亞弗
利加ノ三
大洲ヲ惣
指シタル
モノナリ、
又二ノ中

洲アリト説クモノハ、蓋シコレハ亞米利加及ヒ澳大利亞ノ
二洲ヲ指ス、今此第七圖ハ此論ノ意ニ據テ畫ク所ナリ、立世
論ニハ八個ノ洲名ヲ明ス云ク午州、羊洲、椰子洲、寶洲、神洲、猴
洲、象洲、女洲是ナリ、此中午州トハ蓋シ英等ノ歐州ヲ惣稱ス
ルナラン、何トナレハ英俗ハ牛乳牛飯ヲ以テ大饗ト云ヘル
カ故ニ、ニコ羊州トハ蓋シ澳大利亞ヲサス、地球說畧ニ云「オ
！スタリヤ」ノ人民ハ羊毛ヲ製スルヲ業トス、其輸出ノ價數
百万圓ト云カ故ニ、三ニ椰子州トハニ女州トハ未ク其國ヲ
發見セズ、四ニ寶州トハ西域記ニ今ノ錫欄是ナリト云々、五
ニ神州トハ亞細亞ノ反譯語ニシテ支那及ヒ日本等ヲ古ヨリ
神洲ト名ク、六ニ猴州トハ「アメリカ」ナリ、博物新篇ニ云「ア
リカ」ハ異類ノ猴多キカ故ニ、七ニ象州トハ「アフリカ」ナリ、象

四十五

ナ以テ最勝トスルカ故ニ以上略説云々、
 後ニ天象ヲ略説セハ、先ツ天トハ日月星辰ヲ惣指シテ云フ、
 象トハ其實体及ヒ其運旋ノ形相ヲ云フ、今ハ暫ク星宿ヲノ
 キ日月ノ二曜ニ就テ之ヲ示ス、借其天象ヲ圖スルコトハ經緯
 ノ二度ヲ以テス、其經トハ南北ニ畫ク線コト、緯トハ東西ノ
 線ヲ指ス、又度トハ之ニ二義アリテ、一ニ度量ノ義、二ニ道除
 義、其度量ノ義トハ、立世論ニ日光ノ經度七億二万一千二百
 由旬ト説クカ如キ是ナリ、此日光ハ須彌界ノ半面ヲ照ス數
 量ヲ舉クルモノナレハ之ヲ折半スレハ、則チ南閻浮提一天
 ノミノ經度ニ即チ三百六十万由旬餘トナル、是レ即チ天
 ノ經緯度ヲ三百六十度トスル根源ナリ、第七圖ニ示ス視象
 天ノ如キハ彼ノ實象天ト廣狹異アリト雖モ共ニコレ三百

六十度ナリコレ即チ距等圈ノ理ナリコレヲ度量ノ義トス、
 二ニ度ハ道ノ義トスルハ日月運旋ノ道路ヲサス義ナリ、
 内外二路ノ距離二百九十由旬アリ、其中間ニ三百六十ノ日
 道アリテ、太陽毎日一線ツ、ヲ經過シ一年ニシテ之ヲ往來
 ス、而シテ月ハ卅日間ニ之ヲ往來ス、此日月ノ道路二百九十
 由旬ヲ洋曆ニハ四十七度ト説ク、彼此ノ度數ヲ較スルニ一
 由旬ハ四十里ナル故ニ二百九十由旬ハ即チ一万千六百里ナ
 リ、之ヲ四十七度ニ除クハ一度ノ里數二百四十六里餘ト
 ナル故地球一度ノ里數ト殆ト合セリ、但シ精算スレ然レハ
 此内外路ノ間二百九十由旬ト説クモノハ全ク緯度ノ縮象
 ニシテ肉眼所視ノ天ノ三路ヲ説ク文ナルコトハ度ハ即道ノ
 コトナリ、是レ如ク經緯ノ二道共ニ經緯ニ略説ス、又ク日晷

經云云日月五星晝夜運行各守常度ト、コノ常度ト云ハ日月ノ行道ニ内中外ノ三路ヲ運旋スルニ由リ晝夜長短及ヒ四季等皆此常度ヨリ生起スト云意ニコレモ亦道ノ下チ度ト説タルモノナリ、又起世因本經ニハ未離日月所行道ト云ヒ雜法藏經ニハ須彌山有上下道トアルカ加キコレハ度ノ下チ道ト説キタルモノナリ、此ニ由テ考フレハ洋曆ノ度數ト云ルモノモ亦度量ト度即道ノ二義含蓄シテアル故、彼ノ地球上ノ度數モ即チ日月行道ノ度ニ原據ノ其虛線ヲ設ケタルモノナレハ必シモ洋曆ハ度數ニ具サニ、梵曆ハ粗ナリト一概スベカラス、此故ニ彼ノ測量學ニモ云フ仮ニ天象ヲ動クモノト定メ地球ヲ動カサルモノト視做シ之ヲ推スト反テ測算ニ便ナリト、然ルルハ洋曆ト雖モ天道ノ度數

ニ基キタルト異論ナキ故ニ、其度數論ニ於テハ梵洋共ニ同ナリト知ルヘシ、又日月ノ運行スル所ノ曆理ヲ云ニ自ラ四別アリ、一ニ平行實行、二ニ經行緯行、三ニ東行西行、四ニ視行實行是ナリ、此四雙八行ハ梵漢洋共ニ用ユル處ナリ、然ルルハ此圖ニ示ス所ノ輿地圖及ヒ天ノ縮小セル三路等ハコレ聖教量ト云ヒ、又現量ト云ヒ、又洋説ニ比量ノ立スル所ナレハ正ク三量具足シタル正圖ナリ、○問日月行品ニ據ルルハ南洲春分ハ東州ノ夏至西州ハ冬至ナリ、又タ南北二州ハ即チ春秋二分ナル故日出日沒斜絡シテアリ、然ルニ此圖ハ日出モ日中モ日沒モ共ニ中路ニ畫テ而モ春分ノ圖トスルモノ正ク日月行品ノ説ニ相背セリ如何、答コノ難ハ古來ヨリ異四時家ノ難スル所ナリ、此圖ハ同時家ノ説ニ據テ畫ク

モノナリ、○問何故ニ同時家ノ説ヲ用ルヤ、答略シテ三義アリ、一ニハ現量全ク異四時ノ相ナキカ故ニ、二ニハ餘ノ經論悉ク同四時ノ説ナルカ故ニ、三ニハ普門律師ハ嘗テ異時ノ義ヲ述スト雖モ曆理推歩ノ術ニ至テハ同時ノ義ヲ主張ス、故ニ今ハ同時ノ義ヲ用ユ、○問然ラハ行品ノ文ハ如何カ會釋スルヤ、答コレニハ深山アリ曆理ニ達セサル人ニハ一往ニ辨明シ難シ、然レモ之ヲ一言ニ云フキハコレ日道糾絡ノ相狀ヲ明ス文ナリ、其具サル義ハ予別ニ一冊子ヲ稿シ將ニ説明スル所アラントス、今ハ煩ヲ厭フテ之ヲ畧ス、○問方今布哇國へ通航スル人ノ云ク該國ハ日本ノ南ニアリト、然ルニ今圖ニテハ日本ノ北西ニ位ス斯ク方位ノ違スルモノ如何、答之ハ地球方位ト磁石方位ノ差ナリ、上ノ第二圖

ニ示ス如ク地球方位ニ依ルキハ日本ノ南ニアタレモ若シ磁石方位ニ依ルキハ今圖ノ如シ、萬國地圖ヲ檢スルニ印度等ノ南方ニ布哇國ト云名アルヲ見ズ而シテ北太平洋中ニ三度市ト名クル國ヲ出スコレ今ノ布哇國ニシテ米ノ桑港ヨリ西經卅五度ニアリトス、然レハ地球方位ニテ云フキハ南方ニアリト云フト雖モ其實ハ日本ノ北西位ニアリト知ルヘシ、○因ニ問洋説ニハ空色ノ蒼々タルハ則チ氣ノ積重ニ由テ顯ル、色ニシテ天ノ色ニアラスト、此義實ニ然ルヤ、答大ニ然ラス、氣ハ目ニ見ルヘキモノニアラザレハ固ヨリ色ノアルヘキ理ナシ、彼レ何ソ誤ルノ甚シキヤ、今云ク此ハコレ須彌山南面ノ碧玉寶色ノ空ニ映シタルモノナリ、即チ俱舍論ニ隨寶威德色顯於空故南洲空似瑠璃トイヘルモノ是レ

ナリ、以テ佛説不虛妄ノ一証トナス。コ足ル、又因コ云同論コ
曰ク鉄圍山ヘ大洋水ノ堤防トナリテ能ク水ヲシテ流散セ
サラシムト、彼ノ洋説ノ海水迸散ノ難ニ困却シテ強テ引力
ノ理ヲ附會シテ其難ヲ遁レントスルノ説トハ同日ノ論ニ
アラサルナリ應サコ知ルヘシ、此外論述スヘキ事種々アレ
凡今ハ之ヲ略ス、

第二章 日月交蝕ノ現量實驗ノ圖ヲ解ス

此章ノ中分テ二トス、初ニ羅候障ノ實義ヲ辨シ、後ニ日月蝕
ノ實見ノ示ス、初メニ羅候障ノ實義トハ、○問云西洋ノ月蝕
地影説ノ如キハ地球ノ理既ニ推ケタル上ヘ論スルニ足ラ
ス、然ルニ支那曆ニハ闔虛星ナルモノ月ヲ蝕スト云、此星ト
印度所説ノ羅候星ト同異如何、答体同名異ナリ何ヲ以テ

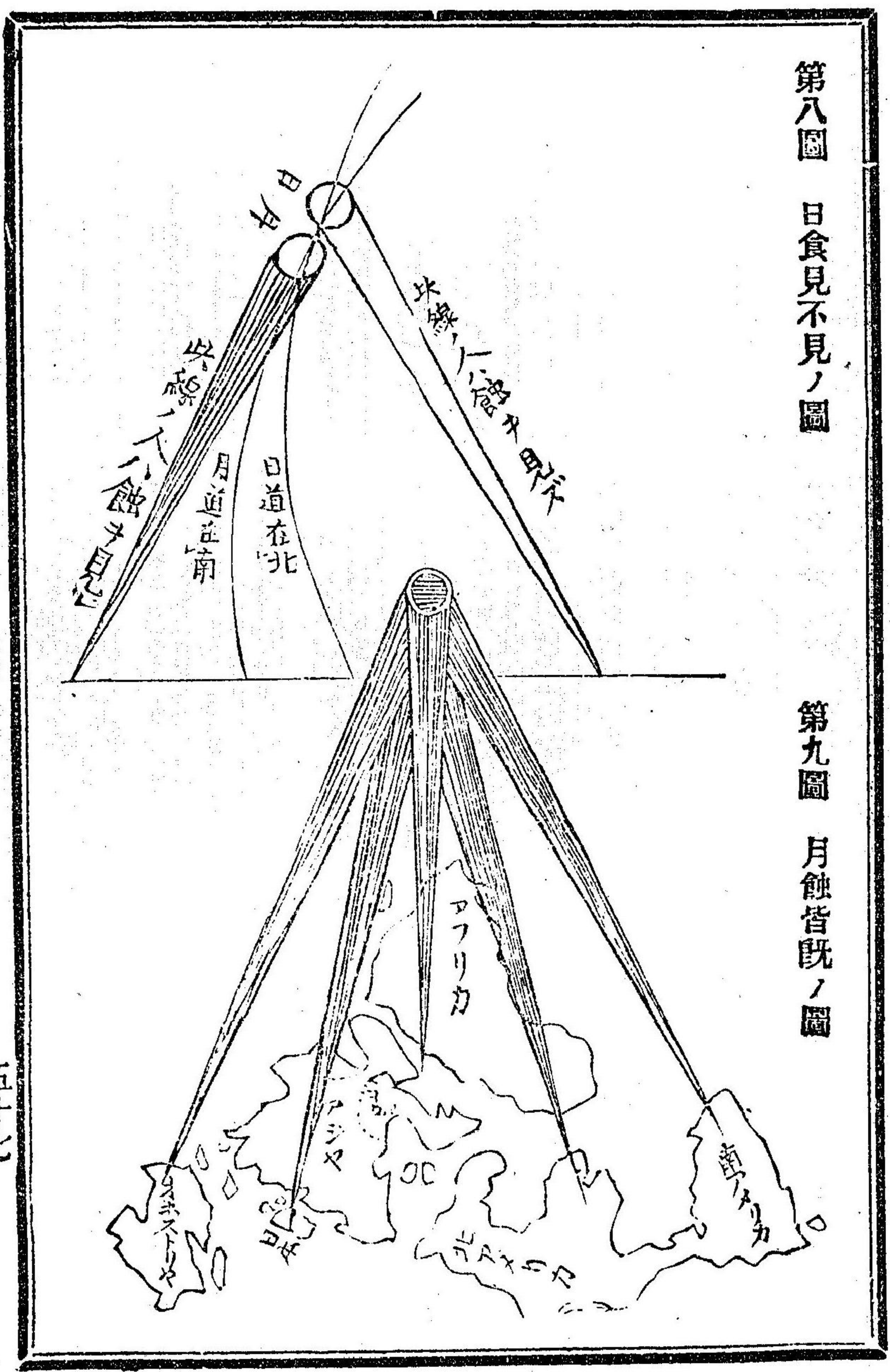
之ヲ知ルトナレハ、羅候星ハ梵語ニシテ譯スルニ二義アリ、一ニハ障、二ニハ復ト翻ス、月光ヲ障ヘテ闔ナラシムルカ
故ニ障ト譯ス、支那曆ハ此障ノ義ニ就テ闔虛星ト名ク、其体
全ク羅候星ニシ、其所立ノ理梵曆ト異ルヲナシ、○問洋曆中
ニ白道ノ交点ヲ羅候ト名ケ、中点ヲ計都ト名クル説アリ、然
レハ羅候ト云ハ唯名ノミニシ別体ナキニ似リ如何、答云
洋曆中ニ梵曆ノ日ヲ用ユルコ數多アリ、何故ナレハ一切曆
法ノ原據ヲ推スニ、往者梵天王印度ニ於テ、初メテ曆法ヲ開
キテ世人ヲ教育ス、而シテ其曆法次第ニ諸國ニ傳播スルニ隨
フテ、種々各自ノ意見ヲ以テ精ヲ加ヘ、後世ニ至リテ數多ニ
區分スル凡、其根原タルヤ梵曆ナルカ故ニ自ラ其名目ヲ因
襲シ來ルモノアリ、然レ凡今ノ交点ヲ羅候ト名クル如キハ

コレ其正名ニハアラサルナリ、故ニ羅候星ナルモノハ、其實
 体アリテ常ニ隱行シテ、六ヶ月ニ一回ツ、白道ノ交点ニテ
 月ト重複スルナリ、實ハ百七十三日ニソ月ト交スト雖モ、聊
 カニテモ交点ノ外ニテ複スルルハ蝕トナラズ、正ク交点ニ
 於テ重複スルル下界ニ於テ初メテ月蝕ヲ見ルナリ、○問云
 然ラハ羅候星ノ實體アルコト何レノ經文ニ出ルヤ、答摩登
 伽經ニ九曜ヲ明ス文ニ、日月ト五星ト羅候ト計都トヲ以テ
 九曜トス、コレ羅計ノ二曜モ七曜ト同ク實體アルノ確證ナ
 リ、又大日經ノ疏ニ羅候星ハ交食神ナリ、計都トハ彗星ナリ
 ト云ヘリ、計都此ニ翻シテ旗ト云、コレ世人ノ能ク知ル所ノ
 彗星^{ホウキ}ニ其形チ長キ故ニ旗ト翻ス、此星モ亦隱行ノ時アリ
 テ現ス、又羅候ハ恒ニ太陽ノ正對ノ点ニ在テ隱行シ、満月ノ

時ニ當レハ月ト重複スル故ニ之ヲ複ト翻ス、上來羅候障ノ
 義辨シ畢ル、

後ニ日月蝕ノ實見ヲ示ストハ、日食ハ黃道日白道ノ交点
 ニ於テ、月体、下ニ在テ日体ヲ覆複スルユヘ下界ヨリ日蝕ヲ
 見ル、又月蝕ハ羅候卑キニ在テ月ヲ蝕ス、而ノ羅候ハ月体ヨ
 リ聊カ大ナル故ニ皆既ノ時ハ万国同ク之ヲ見ル、但シ日蝕
 ハ皆既ノ時ト雖モ地方ニ由テ少差アリ、○問明治六年ノ某
 在英ノ日記ニ云ク、英ノ六月六日吾五月五日、又英ノ十一月
 卅日吾十月卅日、コノ兩度ノ日蝕ハ日本ニテハ見ヘタレモ
 英ニテハ見ヘス、又明治八年度ノ英ノ新聞ニ云英ニ於テ九
 月廿九日ノ日蝕ハ南部ニテハ之ヲ見ル、而ノ北部ニテハ之
 ナ見ズト、以テ地圖ノ證トセリ、コレ實驗ノ說ナリ如何カ之

ナ會スルヤ、答今出ス所ハ唯日蝕ノミ、抑モ日蝕ニハ東西
 差及ヒ南北差アリ故ニ地方ニ因テ見ト不見アリ、平地家ノ
 說ニテモ日蝕ニハ見不見アリト立ス、第八圖ヲ見テ知ルヘ
 シ、何リ之ヲ以テ地圓ノ證トセンヤ、又其月蝕ハ諸國同見ス
 ルト云フモノ其確證アリ、曆象篇ニ略シテ證ヲ出ス、一ハ元
 祿十五年十一月十六日夜酉刻月帶食七分、二證ヲ出ス、一ハ元
 三、日酉刻月蝕二分半ト、又此年十二月廿三日冬至ノ夜酉ノ
 中刻ヨリ戌ノ中刻ニ至リ月帶食皇國ハ八分西洋ハ三分ト、
 以上ハ皇國ト西洋ト國遠ク相隔ツト雖モ同日同時之ヲ見
 ル實驗ナリ、又近クハ西曆一千八百七十二年五月廿二日吾
 明治五年四月十六日午後十時太陰分蝕、全十一月十五日吾
 十月十五日午後五時太陰分蝕、此兩食ヲ較スルニ兩國同時



第八圖 日食見不見ノ圖

第九圖 月蝕皆既ノ圖

ニ之ヲ見ルト、又明治十年五月廿九日午後十時月蝕皆既アリ、皇米ヲ比驗スルニ蝕ノ多少モナク共ニ之ヲ見ル、即チ第九圖ノ如シ、英米留學生某ノ是ノ如ク月蝕皆既万国同見ハ實驗アルキハコレ即チ天地ハ其ニ球圓ニアラスシテ平坦ナルヲハ此一證ヲ以テモ信スヘキニ足ルナリ、○問所引ノ曆象編ニ月帶蝕ニ吾邦ト西洋トニ淺深ノ別ヲ見ル丁如何答月蝕ニハ日蝕ノ如キ東西差南北差ト名クル程ノ差ナシト雖モ、國遠ク相隔ツキハ則チ其差ヲ見ル丁アルヘシ、然レハ近隣ノ國ニ於テハ如此差ヲ見ル丁ナシ、上來ノ所陳チ更ニ約言スルキハ左ノ區別チナス、

日蝕 皆既 能覆ノ月、所覆ノ日ヨリ聊カ小ナルカ故ニ、直下線ノ國ハ皆既ヲ見ルト雖モ遠ク相隔

テタル斜線ニ當ル國ハ、之ヲ分蝕ト見ル、則チ第八圖ノ如シ、

全 帶蝕及分蝕 地方ニ由テ蝕分ノ多寡ヲ見ル、或ハ

甲地ニ於テ之ヲ見ルモ、乙地ニテハ見ヘサルヲアリ、即チ上ニ引ク英ノ新聞ニ云フカ

月蝕 皆既 能覆ノ羅候星、所覆ノ月ヨリ稍大ニシ且ツ

極メテ接近スルカ故ニ万国同時ニ皆既ヲ見ル、即第九圖ノ如シ、

全 帶蝕及分蝕 萬國之ヲ見サル所ナシ、但シ同國及ヒ隣國ニ於テハ蝕分ノ差ナシ、而レハ遠ク相隔ツル國ニ於テハ稍蝕分ノ多寡ヲ見ル、

梵洋 天地平圓解 畢
對說

跋



自古至今能論破地球說而立須
彌說者鮮矣是以金口屬虛妄
實不堪懷慨也法為老氏多事
懷破邪顯正之志日夜嘗仰觀
俯察之勞而研精不倦有此作
焉其後漢之志可謂篤矣嗚呼

僧家而不歸令世人有信我教
則何面目見佛一視乎余欣然
題教言於竹筒山端

明治二十年星次丁亥春日撰于西京寓居
觀天齋真第聞號



明治二十年四月十一日御届
全 一年五月一日出版



編集人

滋賀縣平民

法 留 乘 運

近江國犬上郡河瀨
馬場村九十三番地

出版人

大阪府平民

澤 圓 謙

大阪順慶町壹丁目卅七番地

發兌人

松 本 善 助

大阪南久太郎町四丁目

全

永田 長左衛門

京都西六條花屋町

大阪安土町四丁目

吉田善藏

西京寺町四條上ル

田中治平

賣

全 本町四丁目

中村彌七

全 寺町五條上ル

藤井佐兵衛

全 久寶寺町四丁目

前川善兵衛

全 東六條下珠數屋町

西村九郎右衛門

棚

全 北久太郎町四丁目

柳原喜兵衛

全 中珠數屋町

西村七兵衛

東京日本橋通三丁目

丸屋善七

全 西六條油小路魚ノ棚下ル

川波宇助

所

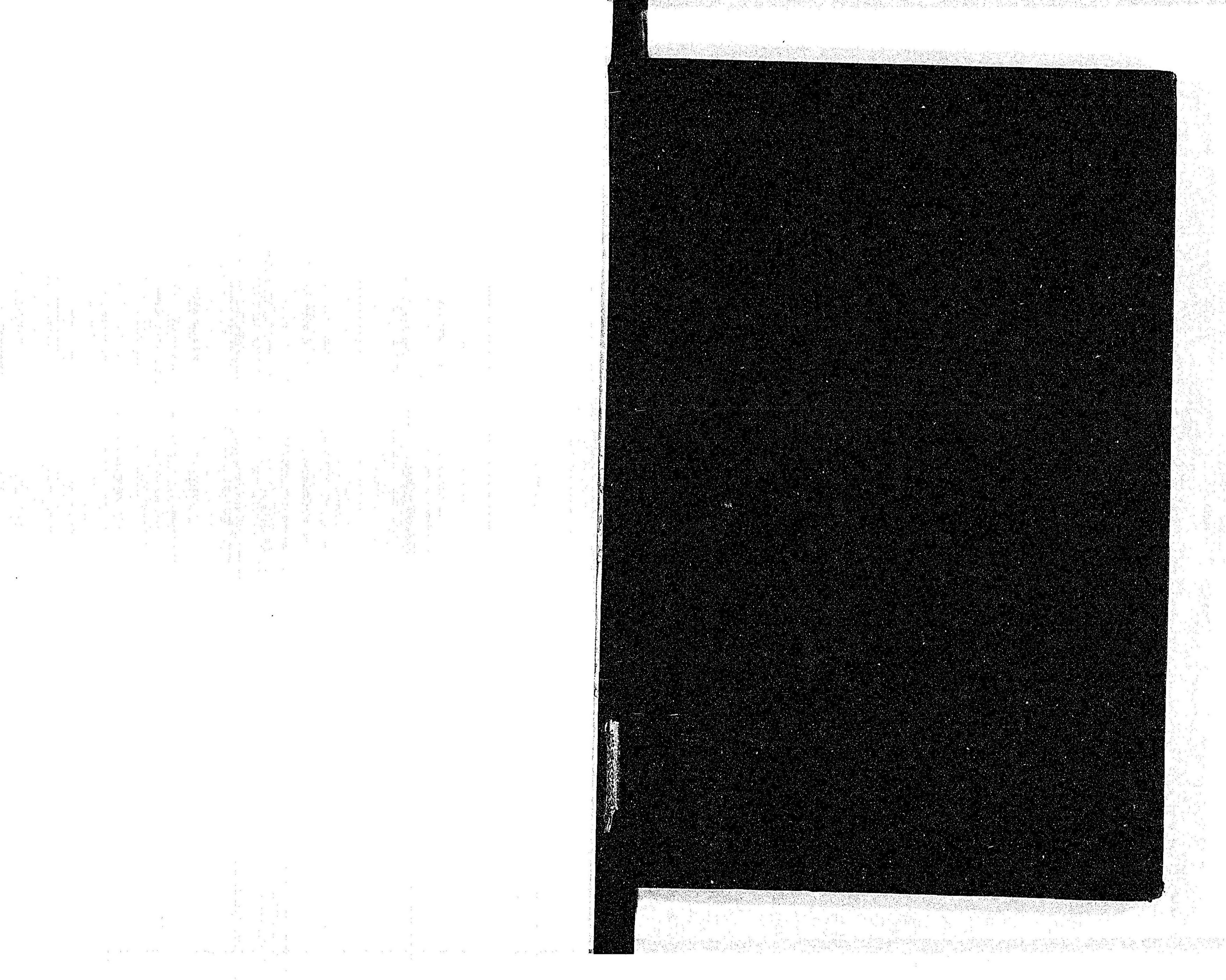
全 芝三島町

山中市兵衛

近江彦根本町

小川九平

25
293



25
293

056195-000-7

25-293

天地平円解 (梵洋対説)

法留 乘運 / 著

M20

CAK-0081



